

# 炕のある暮らし<sup>カン</sup>

遼寧省新賓満族自治県の農村調査から

西 澤 治 彦

## はじめに

### 一 問題意識

### 二 調査地、および調査の概要

## 事例報告

### 四 炕卓

### 五 炕の上での座法

### 六 訪問時の作法

### 七 地卓による食事

### 八 季節による竈、および食事場所の変化について

### 九 宴会の場合

### 一〇 葬儀

### 一一 布団の敷き方

### 一二 民族による差違

### 一三 変化の問題

## 考察

### 一 炎の形状と名称

### 二 满族の伝統的な炎について

### 三 炎の構造、各部の名称、燃料と管理方法

結びにかえて

## はじめに

### 一 問題意識

古代の中国人は、日本人と同じように、「席」や「炕」（カン）などと呼ばれる座具の上に平座する習慣があつた。食事の際にも平座し、「案」と呼ばれる食台を用いていた。ところが、魏晋南北朝のころより西アジアから「胡床」と呼ばれる折り畳み式の椅子がもたらされ、これを媒介として徐々に椅子と卓の生活に移行していった。そしておよそ八〇〇年という長い時間をかけて、宋代ころには椅子と卓、およびベッドを用いる生活への移行が完了する。

これにともない、中国人は平座の習慣を「放棄」し、食事も長方形や方形の卓（後に八仙卓と呼ばれるようになる）を使うようになる。それは銘々膳から共同の卓への移行を意味しており、今日の中国料理の食べ方の基本となつている取り分けの方式を可能とした。「唐宋変革期」といわれるよう、この時代は社会のさまざまなシステムが大きな変動を体験したわけであるが、それは中国人の身体技法や食事方法をも巻き込むものであつた。

この時期の変革は、一体どのようなものであったのか？ 実は、同様の社会変化を、現代の日本が経験しているのである。というのは、日本においては、平安時代、大陸から胡床など椅子座の習慣がもたらされるが、それは貴族階級において特別な場合に用いられただけで、一般に広く普及することはなかつた。その後、長らく平座の習慣が維持され、椅子座の普及は、明治時代まで待たなければならなかつた。即ち明治維新以降、今度は西洋から椅子と卓がもたらされ、かつてとは違つて急速な勢いで一般の日本人の生活に普及していった。現在の日本は、平座から椅子座へ

の移行期のまつただ中にあるといえる。なぜなら、椅子座の生活が無くてはならないものになつてはいるものの、未だに日本人は平座の習慣を完全に放棄してはいないからである。中国が八〇〇年かけて移行した歴史を考えると、明治維新以降まだ百数十年しかたつておらず、完全な移行にはまだ多くの時間がかかるものと思われる。

ところが今日の中国においても、華北の一部と東北地方一帯の地域では、炕と呼ばれる床暖房を用いている関係で、平座の習慣を未だに維持している。もつとも、これらの地域でも大都市では炕に代わる炊事や暖房設備の普及により、平座の習慣は消えつつあるが、農村地域では今日でも依然として平座の習慣が維持されている。

これは中国東北部だけの現象ではなく、東アジア世界全体でみれば、朝鮮半島のオンドルの使用と平座の習慣の維持も、同列に論じられるべき現象である。

さて、朝鮮半島のオンドルに関しては、それなりの関心が寄せられ、調査研究もなされているが、中国東北部の炕となると、私の知る限り、きちんとした調査はどうもなされていないようである。(註) 東北部に住む、炕を日常の生活で使っている人々にとつては、当たり前すぎて研究対象にはなり得ないであろうし、他地域の中国人にとつても、「辺境故に古い習慣を維持している地域」ぐらいの意識しかないのではないかだろうか。

ところが、現在も平座の習慣を維持している日本人にとつては、この炕のある暮らしは非常に興味深い問題なのである。即ち炕は、家族のくつろぎの場であり、来客があれば応接の場となるし、毎日の食事の場でもあり、夜は寝る場となる。つまり炕は椅子になつたり、床になつたり、ベッドになつたりもする、至極便利なものなのである。おまけに、冬は暖かい暖房施設となる。

もつとも、夏の間は、炕につながる竈を使用すると部屋の中が暑くなるので、別の竈を使用することもある。もち

ろん、夏の間も炕はくつろぎの場や寝る場所として用いられるが、暖房施設としての役割は休止する。食事も夏の間は、厨房の土間に炕の上で使っている低い「炕卓」と呼ばれる食台をおき、低い椅子に腰掛けてなされることもある。従つて、食事に関する言つと、季節によつて食事場所の使い分けをしていることになり、いわば、ダブル・コードの状態といえる。これは現代の韓国においてもみられる現象である。

本稿は、こうした問題意識をふまえた上で、一九九九年三月に中国東北地方の遼寧省新賓県の農村において行つた、炕とその使われ方に関する概況調査の報告である。

## 二 調査地、および調査の概要

調査地の新賓県は、遼寧省の省都である沈陽から、北東方向に直線距離にして一四〇キロほど離れたところにある。さらに三〇キロほど東に進むと、吉林省との省境に達する。地理的には、長白山脈の末端に位置し、海拔五〇メートル前後の丘陵地帯となつてゐる。【図1-1参照】

県の全人口は三三万人。県名からも分かるように、満族をはじめ、漢族、朝鮮族などの少数民族が居住している。満族自治州となつたのは改革以降の一九八五年のことで、満族としては全国初の自治県となつた。新賓県は、ヌルハチが最初の都と定めた、ヘトアラ（現在の永陵鎮老城村）のあつた場所でもあり、清朝の発祥の地としても有名である。現在では、関連する遺跡を整備し、観光開発事業が進められている。

新賓県で調査を行つたのは、県城（旅社と清真寺）、永陵鎮老城村（満族）、旺清門鎮大河東村（朝鮮族、満族）、旺清門鎮（朝鮮族）、新賓縣新賓鎮劉漢村（漢族）と劉鮮村（朝鮮族）の各地である。【図1-2参照】訪問した農

図1-1 遼寧省における新賓県の位置

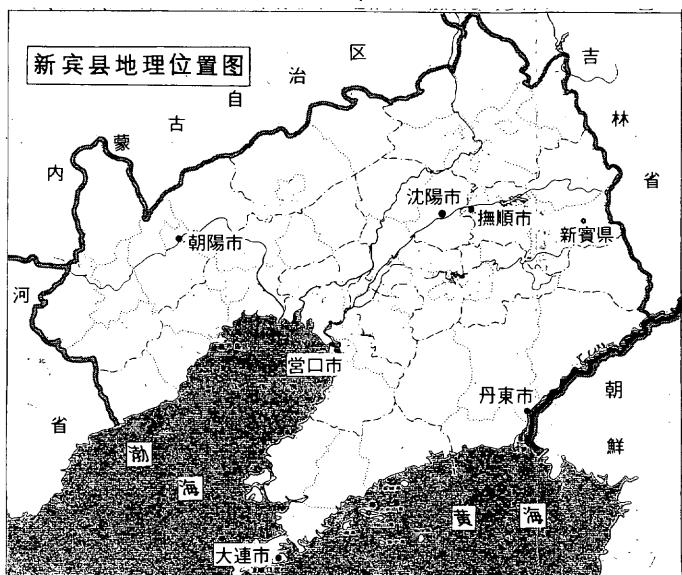


図1-2 新賓県内の調査地



村は、いすれも主要な収入源は農業で、水田での稲作のほか、トウモロコシや大豆などを栽培している。このほか、沈陽西塔朝鮮人街も訪問した。日程は以下の通り。

三月一二日 大連入り

三月一三日、大連から列車で沈陽に至り、そこから車で新賓県に到着。

三月一四日 午後、バスに乗り、永陵鎮老城村へ。滿族宅を二軒まわる。

三月一五日 午前、車をチャーターし、旺清門鎮大河東村へ。朝鮮族宅三軒、滿族宅一軒まわる。午後、旺清門鎮へでて、そこで朝鮮族宅一軒を見る。

夜、朝鮮族の老幹部の人らと会食。そこでもインタビュー。

三月一六日 午前、雪のなか、県城内の旅社や清真寺などをまわる。午後、三輪車で劉家村へ。漢族宅一軒、朝鮮族宅一軒まわる。

三月一七日 車で新賓県城から沈陽へ移動。西塔の朝鮮人街へ。炕卓を売つているのを見る。

三月一八日 沈陽から大連へ列車で移動。

なお、調査にあたつては、劉正愛氏に同行いただき、調査地の選定や移動から、朝鮮語の通訳まで、全面的にお世話になった。新賓県は実は劉正愛氏の故郷であり、現地では、多くの老幹部の方々のご協力もいたいた。記して感謝する次第である。

事例報告

一 永陵鎮老城村における炕とその使われ方

潘徳利（満族）

老城村ではじめに訪ねた家は、潘徳利（満族）の宅であった。村の入り口で子供を連れた婦人がいたので話しかけ、そのままお宅におじやました。小さな子供が三人いるので、三人も生めた訳を聞くと、罰金を払ったのだという。そのため財産がなくなり、いまは借家住まいをしているので、部屋も汚いとのことであった。

この家には、東側の部屋に南炕と北炕の二つがあり、さらに西側の南側に炕が一つ、計三つの炕がある。但し、日常の食事の場や睡眠の場として使うのは、東側の北炕である。これは満族の炕の特徴的な構造だが、北炕と南炕とがつながっていて、そこを煙が通り、煙突に流れるようになっている。このような炕を「万字炕」という。西側の部屋の炕は物置になっていた。

炕を炊くのは、一日二回、朝夕の食事を作るときで、朝食は四時ぐらいに作り始める。夕食は五時半から六時で、夜は八時か九時には寝る。

燃料は、薪で、二〇〇元～三〇〇元（単位は一年）かかる。山に入つて取るのは自由のこと。この家では、ほかにプロパンガスもあった。

図2 焱の各部の名称

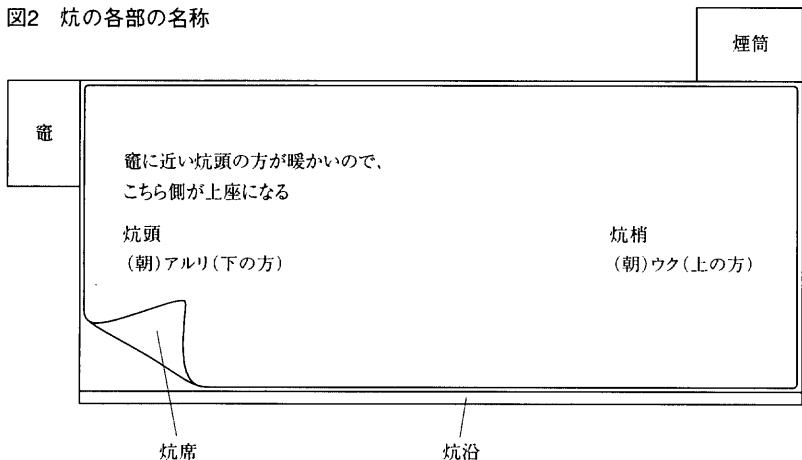


図3 藩徳利宅の間取り

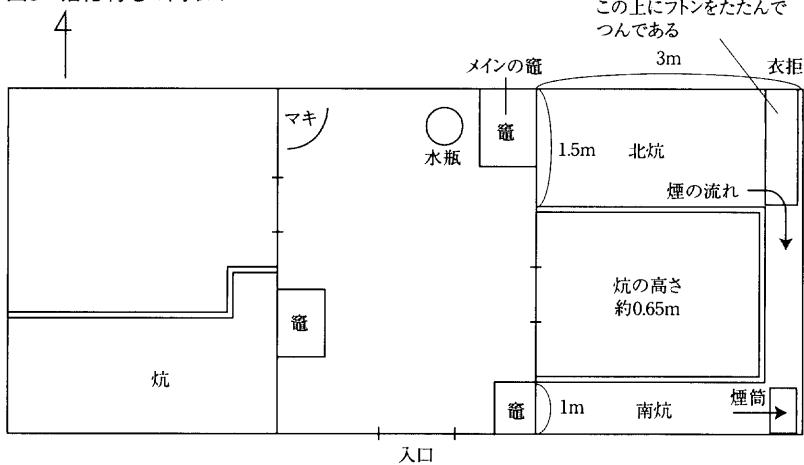


図4 布団の敷き方

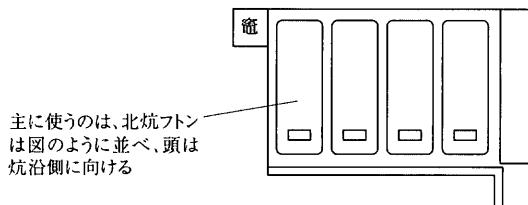




写真2 北炕に腰掛けた三人の子供  
小さな子供にとってはかなり高い



写真1 潘德利宅の全景



写真4 北炕の竈 竈の左後方に水瓶  
がみえる



写真3 北炕に置いた炕卓 後ろに見  
えるのが、衣柜

炕卓は円型であった。これは三〇年ほど前に、尼さんが出家の際にくれたものであるという。

布団は、畳んで炕の上に置くのではなく、本来は「衣柜」(タンス)に入れるものだという。(写真3)ではタンスの中ではなく上に置いてあるが)寝るときに布団は、[図4]のように北炕に横に並べる。まくらは「炕沿」側([図2参照])に向ける。結果として南側がまくらになるが、これは常に南側にまくらを置くということではなくて、常に炕沿側にまくらをおくようにして寝る。

炕の各部の名称を図示したものが[図2]である。詳しくは、考察の三で述べるが、ここでは簡単に名称だけ整理しておきたい。炕の縁に組み込まれている木を「炕沿」という。炕の上に敷かれている敷物を「炕席」という。また炕の上での上座、下座の名称であるが、竈に近い方を「炕頭」、遠い方を「炕梢」と呼ぶ。但し、朝鮮族は後述のように、「炕頭」側をアルク(下の方)、「炕梢」側をウク(上方)と呼ぶ。

## 高振海（満族）

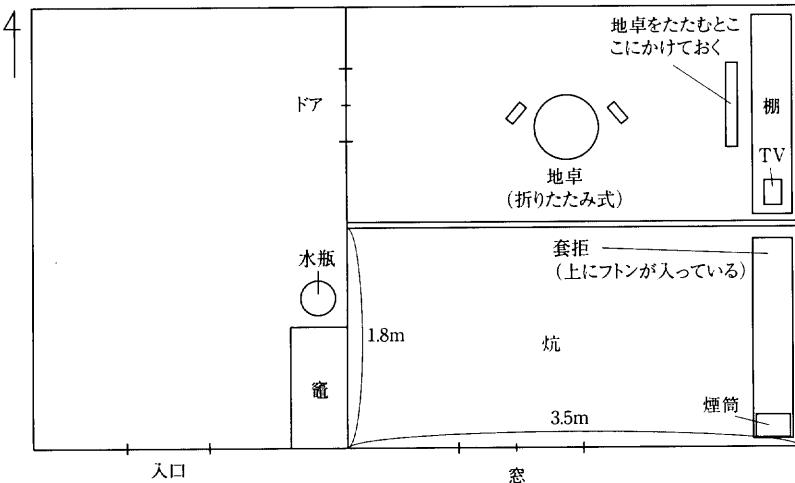
次ぎに訪ねたのが、同じく満族の高振海宅（満族）で、隣の孫友宅とは長屋のためつながつていて一軒家のよう見えるが、親戚関係はない。

四人家族で、この家には南側に炕が一つあるだけであった。そのため、満族の特徴的な方字炕にはなっていない。

この家には、立派な「套柜」が置かれていた。これは洋服タンスと棚などがセットになつたもので、先の潘德利（満族）が言つていたように、畳んだ布団が中に納められていた。なお、炕の上に置く棚やタンスの総称としては、「炕柜」がある。「套柜」以外は、「炕柜」の上に布団を畳んで置くのが普通である。他に、「座箱」（木製のタンス、次の孫友宅にあつた）というのもある。

この家では、炕卓は使つておらず、「地卓」と呼ばれている、脚の高い折り畳み式の円卓を使つていて。これを使う場合は、椅子と「炕沿」の両方に座つて食事をする。終われば、畳んで立てかける。「地卓」は、「炕卓」に対応する言葉で炕のあ

図5 高振海宅の間取り



炕のある暮らし 遼寧省新賓滿族自治県の農村調査から 西澤治彦



写真6 南炕でくつろぐ一家



写真5 長屋のため、隣の家の煙突を含め、三本の煙突がみえる

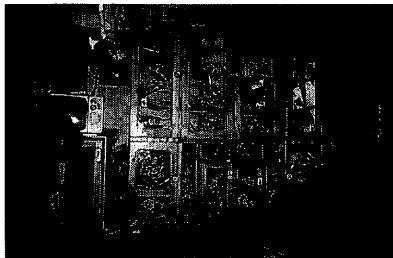


写真8 南炕の端に置かれている、「套柜」 上段に布団が畳んで収納されている

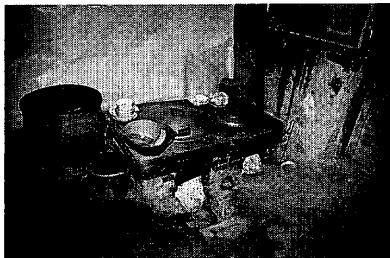


写真7 南炕の竈 炕はこの向かいにある 横にあるのが水瓶 右に入り口が見える

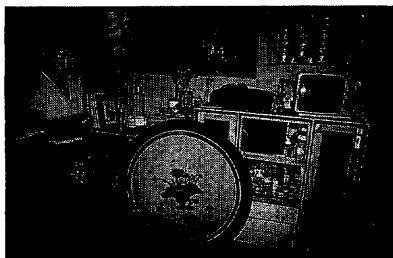


写真10 「地卓」を置んだところ



写真9 「地卓」を出したところ 椅子のほか、「炕沿」に腰掛けて食事をする

る地方の用語であり、他の地方では使われていないし、辞書にものっていない単語だ。実際の「地卓」は、どこにでもある折り畳み式の円卓である。

狭い家ながらも、家具類は整然と並べられ、清潔に保たれていた。炕卓はないのか、と聞いたところ、隣の家にすると、案内してくれた。

### 孫友（満族）

隣の孫友宅へ。同じく満族の家で、こちらは三間ある。炕も東側の南炕北炕と、西側の小炕と、三つある。従つて煙突も東側（大）と西側（小）と、二つある。（長屋全体としては隣の高氏宅のをあわせ三つある）。

南炕と北炕は、満族の様式に則つてつながつた万字炕となつてゐる。連結部分（後述する文献によると、これを西炕と呼ぶとのこと）の上には、座箱などのタンスがおかれてゐるため、実際にはそこに人間が座つたり、寝たりするスペースはなく、あつたとしてもそのようには使わない。

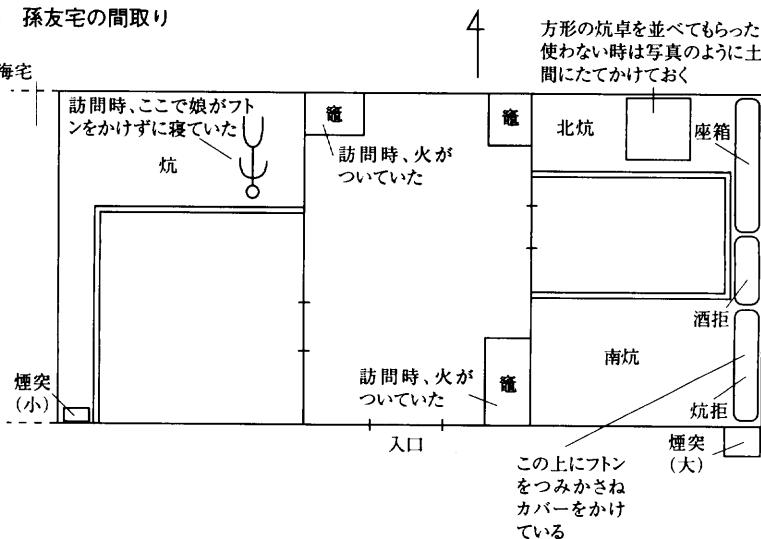
この家の座箱はかなり古いものとのこと。その隣には、「酒柜」というのが置かれていた。布団は炕柜の上に畳んで置かれ、さらにおけられないように網状のカバーが掛けられていた。

孫氏は五人家族だが、訪問したときには夫婦と娘さんがいた。娘さんはなんと、西側の小炕の上で、服を着たまま、布団も掛けず寝ていた。途中で起き、我々の話に加わり、親子三人で写真を撮つてあげた。**【写真11】**あと、弟がきていたほかは、隣人が集まつていた。このことからも、隣人が頻繁に往来してゐるのがわかる。

訪問時、娘が寝ていた西側の部屋の小炕の竈には火がつけられていた。これは娘が寝たからつけたのか、あるいは

図6 孫友宅の間取り

高振海宅



はついていて暖かいからそこで寝たのであろう。東側の北炕の竈は火がついていなかつたが、南炕はついていた。

この家では、方形の低い、炕卓を使っていた。脚は折り畳めないようで、使わないときは、厨房の土間に立て掛けておく。食事の際には、他に卓が見あたらなかつたので、おそらく広い南炕に置き、一家五人がこれを囲んで食事をするものと思われる。【写真13】では北炕においてもらつたが、これは写真を撮るためにお願ひしたもの。

布団の敷き方を実演してもらつた。先に敷き布団を敷き、枕をおいて、最後に掛け布団を内側に、ちょうど寝袋のよう織り込み、その上に置く。寝るとときは、この形を崩さないように寝袋状の中に潜り込み、寝るという。【写真15・16 参照】

この寝袋のような掛け布団のやり方は、満族に限らず、漢族一般の布団の敷き方である。写真のように、広い南炕でも三枚から四枚が限度なので、残りは別な炕に敷く（北炕か西側の小炕かは聞きそびれた）。訪問時、西側の小炕にも火がつけられていたことを考慮すると、西側の小炕の可能性が高い。これだと、

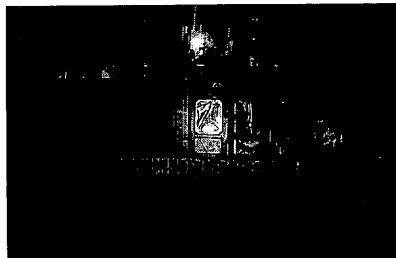


写真 12 南炕と北炕とをつないでいる西側部分(西炕)を正面からみたもの



写真 11 東側の南炕 ここが家族のメインの活動の場と思われる

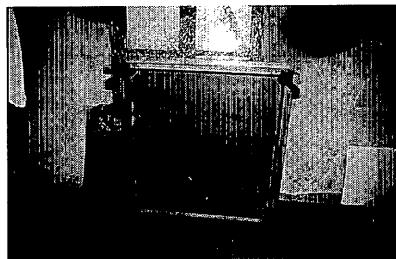


写真 14 使わないときは、土間に立て掛けておく

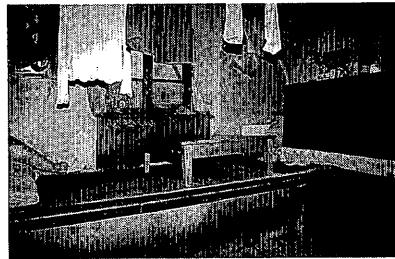


写真 13 北炕に、方形の炕卓を置いてもらったところ

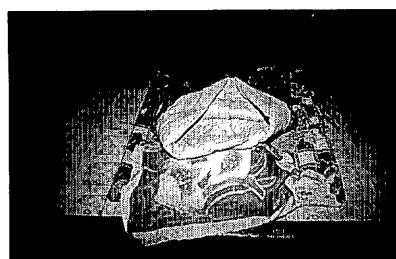


写真 16 完成したところ。袋状の中に潜り込んで寝る。

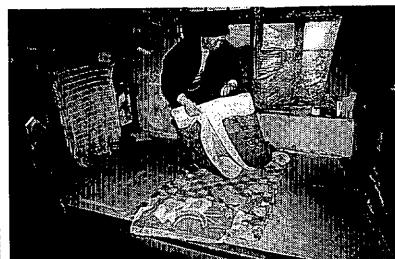


写真 15 布団を敷くところ

男女を分けるなど、部屋も別々にできる。  
高・孫両氏の炕を見て、確かに、家族や隣人など、密着した生活を送っていることがうかがえる。夜、四～五人で炕の上に寝るとなると、相当、密着して寝ることになる。とりわけ、冬は炕の上で過ごすことが多そうである。

## 二 旺清門鎮大河東村における炕とその使われ方

大河東村は、旺清門鎮に属する、朝鮮族と漢族の雜居村である。かつての村名は「獐子圈」といった。昔は朝鮮族の割合が多かったが、出稼ぎによつて豊かになつた朝鮮族が、村を出ていったため、現在では漢族の方が多いという。（現在では金さえあれば、都会などよその土地に家を買って移り住むことができるようになつた）そのためか、小学校でも朝鮮語のクラスがなくなり、朝鮮族の子供は、旺清門鎮の小学校まで通つてゐるといふ。

ちなみに、江蘇省では○○回族郷などという言い方をするが、新賓は満族自治県なので、少数民族がいて当然といふことで、○○族鎮／郷とか、○○族村とは言わない。

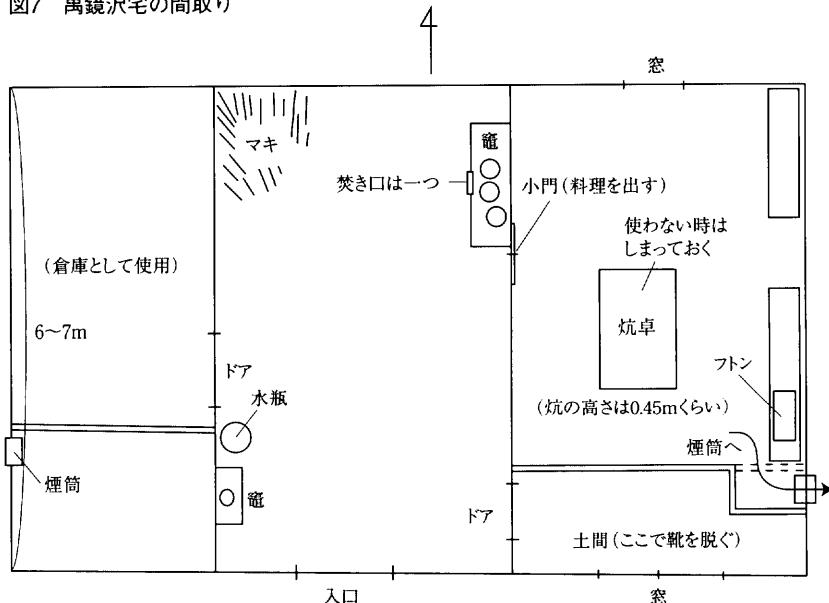
### 禹鏡沢（朝鮮族）

父の代の、一九一五年ころ、大邱（テグ、現、韓国）から中国に渡つてきた。氏は中国生まれ。その後、転々とながら、一九五四～五六年にかけてこの村に移住してきた。（村の歴史はもっと長い）禹鏡沢氏は長らく教師を務めてきた。

大家族でこの家に住んでいたが、分家していった。次女は韓国に在住している。昨年（一九九八）、夫婦で韓国に、次女を訪ねてきたといふ。

現在は、夫婦のみの二人で暮らしている。訪問したときには、たまたま長女が訪ねてきていた。息子夫婦がいたと

図7 禹鏡沢宅の間取り



きには、もう一つの小さな炕を使っていた。現在は、使われず、倉庫代わりになつていて。

朝鮮族の炕は、漢族や満族と異なり、家屋の大部分を占めるほど、大きく広いのが特徴。高さも四〇~四五センチ位と低い。

また、現在の韓国の食堂などでもよく見られる構造であるが、竈側から、部屋へ料理を出す際に使う、小さな小窓（中国語で「小門」）がある。使わないときはこれを閉めておく。

家にあつた炕卓は漢族式のものだが、朝鮮語で「パプサン（飯床）と呼んでいる。すでに二〇年近く使ってている。七〇年代初めまで、家には朝鮮式のより小さいトクサン（独床）があつた。五〇年ほど昔は、老人のみがトクサンで食事し、子供は炕席の上で、食台なしで食べていた。その後、七〇年代以降、パプサンで食事をするようになった。これを機に、一家平等に、食卓を囲んで食べるようになつたという。このとき、これに伴い人間関係に大きな変化がもたらされたものと

図8 炕の上の座順

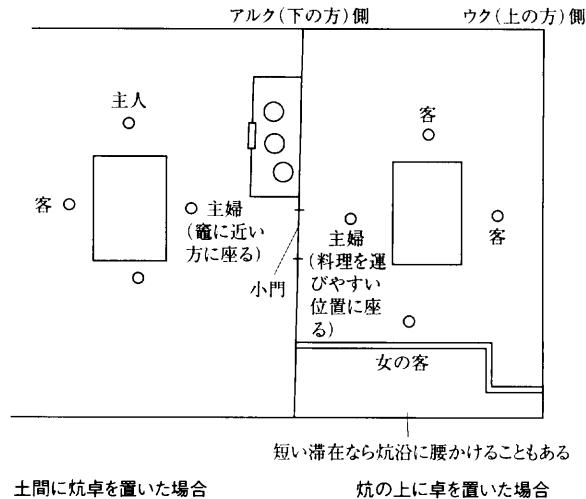


図9 炎の上の布団の敷き方

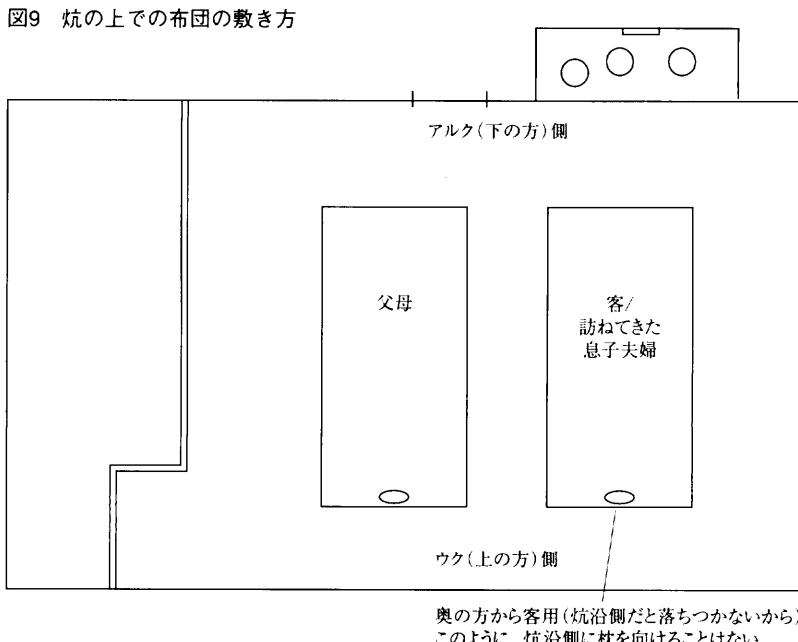


図10 伝統的な朝鮮族の家屋の間取り  
(これは同行の劉正愛さんが下放した時の家を再現したもの)

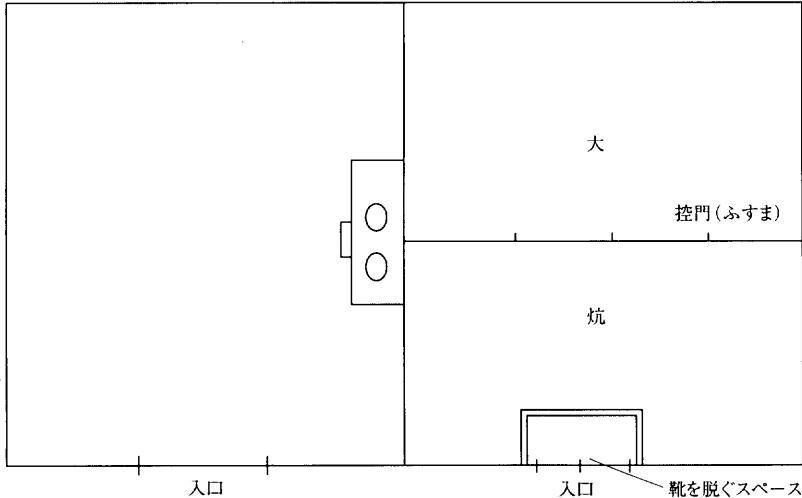
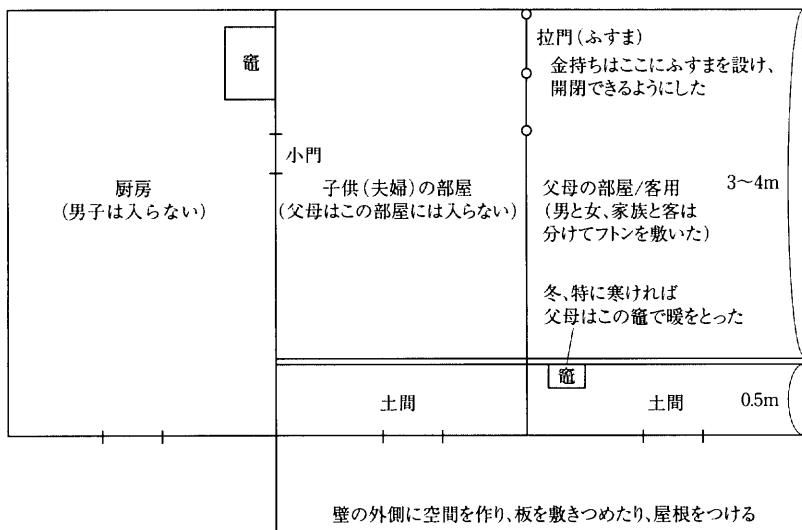


図11 伝統的な朝鮮族の家屋の間取り



炕のある暮らし 遼寧省新賓満族自治県の農村調査から 西澤治彦

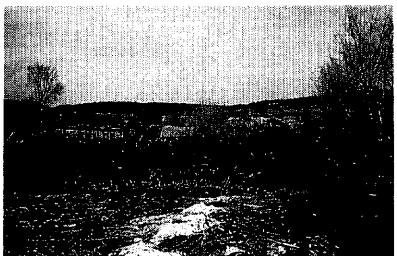


写真 18 禹鏡沢氏宅遠景（朝鮮族）  
二つの煙突が見える。その右奥に、小さな草砬子房が見える



写真 17 大河東村の入り口を示す石碑



写真 20 壴の前の土間にバブサンを置いてもらったところ。夏の間はここでこのように座って食事をするという



写真 19 入り口から厨房を見たところ



写真 22 右側の炕のある部屋。バブサンを置いてもらった



写真 21 右側の炕のある部屋。炕が大きいため、土間は狭いが、婦人のように腰掛けることもある。写真に写っているのが禹鏡沢夫婦



写真24 炎のある部屋に通じる小窓を開けた状態、厨房側からみている



写真23 火盆（ホアリ）と呼ばれる、火鉢。冬の間はこれで暖を取る。写真のには実際の火が入っていないが、暖を取る様子を再現してもらっている



写真26 戸棚の上に畳まれている布団



写真25 棒槌（マンチ）と呼ばれる、糊づけした衣類やシーツなどのしわをのばす道具



写真28 布団を敷いた状態。実際には、写真のように縦ではなく横に敷く。写真のは、敷き布団が1人用のを2つ並べ、上に二人用の大きな掛け布団を敷いている



写真27 まくら。角張っている（左側の3つ）のが朝鮮族のもの。平らなのは「日式」、つまり日本統治時代の名残

思われる。

布団には、一人用と二人用とがある。主人の布団は一人用。息子夫婦は二人用のを使っていた。なお、掛け布団は、朝鮮族の場合、漢族や満族のように袋状に丸めることはせず、日本と同じように平らに敷く。そのためか、掛け布団は、朝鮮族の場合、漢族のものよりも多少厚い。布団の上げ下げは女の仕事のこと。

### 禹鏡沢宅の後方にあつた草砬子房（朝鮮族）

禹鏡沢の後方に、土壁の家があつたので、これも併せて見せてもらつた。土壁の家は、中国語で「草砬子房」といい、今となつては珍しい家である。

建物自体もまるでお伽の国みたいに小さく、低い。この家は一九六〇年代に建てられたものだという。訪問時は中年の男性一人が住んでいた。

同行の劉正愛さんによると、昔、親戚のいる朝鮮族の村に下放した際、親戚の隣の敷地に新築した家が、草砬子房だった。草砬子房だから小さいと言ふことではなく、その家は、このとき訪問した家の二倍ほどの大ささだった。その家は、少なくとも、一九八三年に訪ねた際にまだ残っていたが、現在では残っている可能性は低いとのこと。だとすると、この家は本当に珍しいことになる。

後日、朝鮮族の老幹部に、朝鮮族の土房について話を伺つた。土房を作るには、煉瓦は全部で一〇個も使わず、ワラと泥を混せて作っていく。ゆっくり作業して、一ヶ月もあれば作れる。壁は一メートル間隔の木の柱にワラを巻き付けていき、これに泥をぬつて壁とする。こうすると暖かいという。

図12 草畠子房の間取り

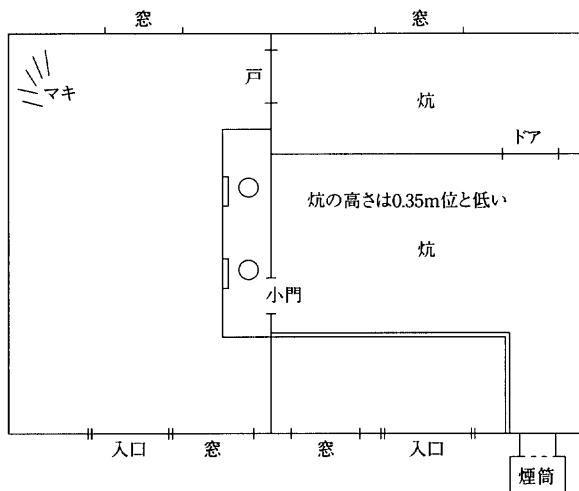


写真 30 炕に腰掛けている住人の男性



写真 29 正面の入り口。右の入り口(炕のある部屋)の方は大人の膝よりやや高い位置まで敷居が高くなっている



写真 32 窓。右奥に見える小さな戸が、炕のある部屋の奥の間に通じる戸。窓の上に小さな、料理を移動させる「小門」がみえる



写真 31 炎のある部屋から入り口側を見る

土房の場合、炕も煉瓦を使わず、石を使う。蓋は山から平らな石を見つけてきてかぶせ、その上に泥を塗ったという。

任志有（満族）

禹鏡沢氏の炕卓を譲つて欲しかったが、一つしかないようなので遠慮する。ほかに複数持っている家はないかと、村内を歩き、満族の任志有氏宅を訪ねる。

この家では、比較的新しい正方形の炕卓と、一九四〇年代から使っているという長方形の炕卓の二つの炕卓を持つていた。古い炕卓は今は使っていないと使うことだったので、こちらを譲つてもらった。こちらのが小さく、持ち運びに便利なのと、より伝統的なものだと言うことで、むしろ好都合であった。一九四〇年代、店で買ったのではなく、他村の大工に作ってもらつたという。当時で五元ほどしたという。購入に際しては、安すぎても失礼だし、あまり高くともまずいので、同行の劉正愛さんと相談し、五〇元とした。

禹玉祚（朝鮮族）

続いて、旺清門鎮にいき、そこでもう一軒、見せていただいた。大河東村

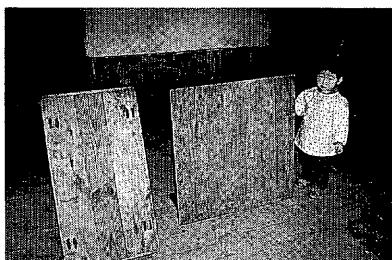


写真34 任志有氏宅にあった、2種類の炕卓。右側が比較的新しい、正方形の炕卓。左側が1940年代から使っている長方形の炕卓。こちらの方を譲つてもらった

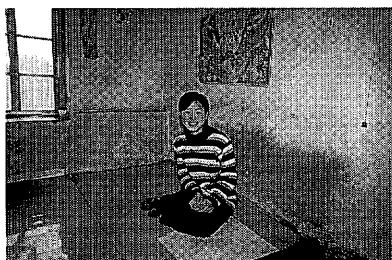


写真33 居合わせていた、曾畠（任さんの奥さんの妹の子）さん。こんな山村の炕の上に、都会的な服装と雰囲気の子が座っていたのには、少し驚いた。若い女性はどこにいても着飾るもののようにだ

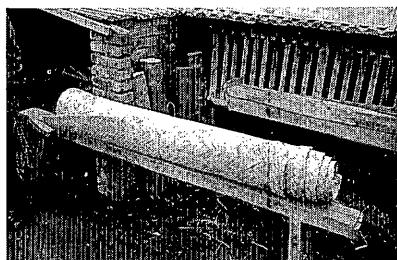


写真36 伝統的な、葦を平らにして編んで作った炕席



写真35 旺清門鎮の中心地

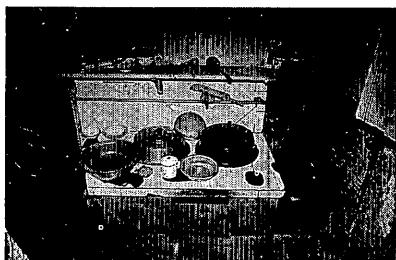


写真38 窯。左上に、料理を出し入れする「小門」が見える



写真37 炕の上に置かれた、正方形の炕卓。これも比較的新しいものと思われる

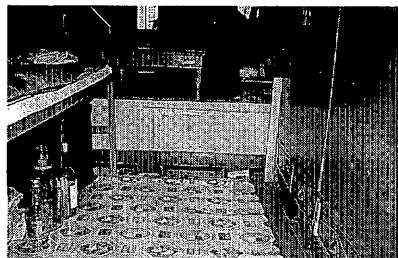


写真39 「吊炕」を横から写したもの

ものを見せていただいた。これは一九九〇年の初めころから東北地方で流行している新しい炕の様式で、炕の底を上げ底にし、煙が通る空洞を狭めている。この結果、少ない燃料で多くの暖房効率を上げることが出来るという。底をあげる高さは、五センチくらいから二五センチくらいと、家によつて幅がある。高く上げ底にしている家では、その隙間に靴をおいたり、箱の収納に利

の禹鏡沢氏の姉に当たる人で、案内してくれたのは、禹鏡沢氏の兄の禹英沢氏だった。禹英沢氏は満州国時代、中村という日本人の姓を名乗つていたという。

この家では、「吊炕」と呼ばれる

用している。鎮ゆえに、流行の吊炕があつたわけである。

訪ねた際に、炕席について聞いたところ、うちに伝統的な炕席があるというので、わざわざ倉庫から取り出して見せてくれた。これは葦を平らにして、編んだもの。まだ使っておらず、新品だった。これが自分で編んだものか、購入したものかは聞きそびれてしまった。年寄りであれば、自分で手で編むことが出来るという。いずれにせよ、今となつては非常に珍しいものである。

炕卓は、二つあり、伝統的な長方形のものと、比較的新しい、大きめの正方形のものがあった。朝鮮族の炕らしく、やはり料理を受け渡す「小門」があった。全体に鎮らしく、家も竈も清潔に保たれていた。

### 三 縢城における旅社、および清真寺での炕

#### 吉祥飯旅店

自分の家を改造して、一〇年前に開店した。炕の火を焚くのは、午後二時に一度だけとのこと。これだけで夜までずっと暖かいという。燃料は薪と石炭。竈は全部で三つある。訪ねた時間が午前中であつたため、炕に火は通されてなかつた。

客部屋は、一人用が三室、二人用が五室ある。全室で一四～五人の収容能力がある。宿泊代は一人一泊五元。食堂も営業している。訪ねた際には、数組の客がいたが、皆外出中であつたので、使用中の客室も見せてくれた。

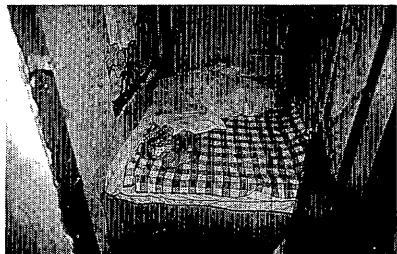


写真 41 客用の一人部屋

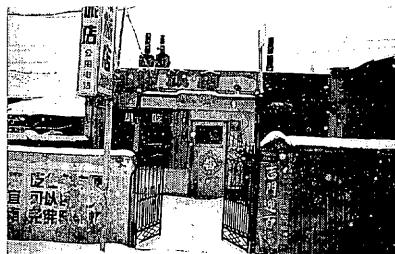


写真 40 吉祥飯旅店の全景。訪ねたとき、ちょうど雪が降り始めた。建物から3つの煙突がみえる

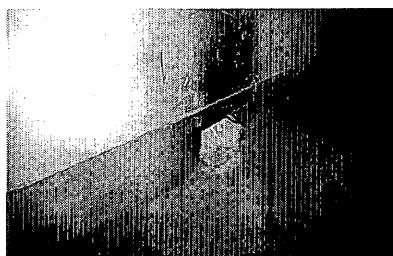


写真 43 客用の炕の焚き口の一つ

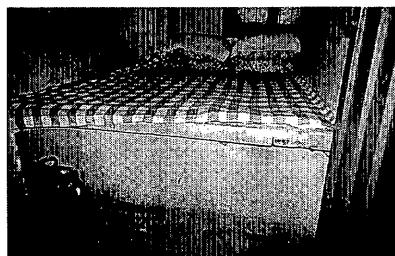


写真 42 客用の二人部屋



写真 44 建物の奥にあるトイレ。その横に大量の薪が積んでいた

### 勝利街清真寺（遼寧省新賓県勝利街清真寺）

清真寺があるというので、場所を聞きながら訪ねた。ここでは煙を見るつもりはなかつたが、結果として、興味深い山東式の煙を見ることが出来た。

アーホンは、若い三〇歳前後の丁安海氏。山東省出身で、三年前に当地に来た。管理している所謂「郷老」は、丁玉貴氏（六五歳前後）で、やはり山東人。清真寺の向かいに住んでいる。一九六四年に当地に来た。出身は、山東省陵縣黃集鄉白集。

当県の最も古い清真寺は、清代の光緒年代まで遡る。当時、一〇数戸のムスリムがいた。その後、八カ国連合軍が来てから、一九四五年まで、事実上、清真寺はなくなつていていた。女寺は昔からなかつた。一九四五年以降、国民党軍管下で復活した。その後、一九六〇年には一人いたアーホンが南京に行き、一時期、アーホンがいない状態が生じた。文革時、アーホンが一人いたが、アーホンが共産党に入党したため、宗教活動が出来なくなつた。しかし給料はもらつていた。そういう状態が一九八三年まで続き、この年に、別なアーホンが来て、宗教活動を行つた。そして、現アーホンが一九九六年にやつてきた。

清真寺は全県でここ一つしかない。全県のムスリムは三〇余戸、人口は一九六人。少ないので、皆互いに面識がある。県城以外の鎮に二三、四戸が住んでおり、そのほとんどは農村部に住んでいる。このうち、二戸のみ寄り添つて住んでいる他は、皆、分散して住んでいる。その内訳は、旺清門に四戸、南雜木に三戸、後倉（小紅廟）に三戸、湯団に一戸、馬架子に二戸などとなつてている。彼らは皆外地から移住してきたわけであるが、それぞれ個別に移住してきたという。山東人は多くなく、河北人は一部を占めるが、北京付近の廊坊や通化（吉林省）が多い。沈陽からも二

図13 清真寺の建物の配置図

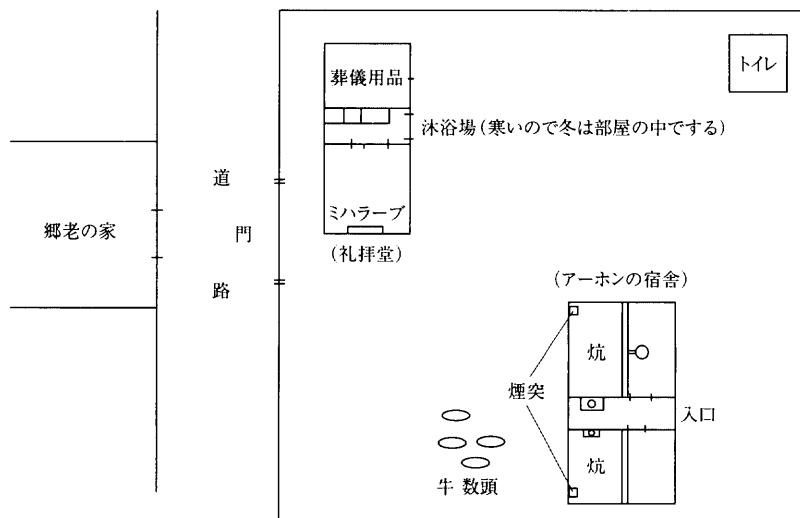


図14 アーホンの宿舎の間取り

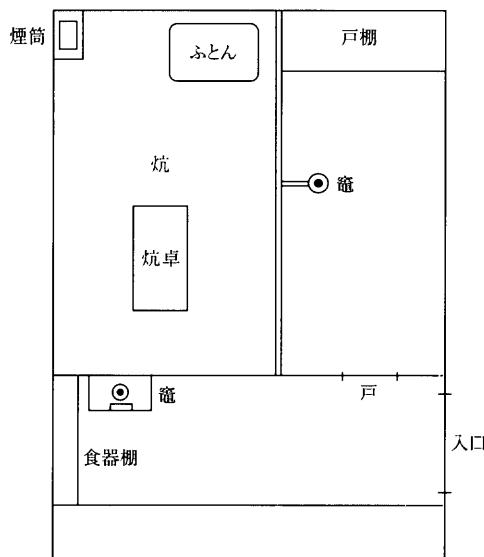




写真 46 内側から見た清真寺内の建物。手前左側がアーホンの宿舎。これは1973年に建てたという。炕はこの中にある。右側が礼拝堂。当然、この中には炕はないので、煙突も見えない。雪の降る日も礼拝のさなか、暖房は一切ないことになる



写真 45 清真寺の入り口にて。中央が丁アーホン。普段は戸が閉められていることが多い



写真 48 その横にある、竈と食器棚。ここが台所となる



写真 47 炎のある部屋。アーホンはここで食事をし、くつろぎ寝る。凝った作りの長方形の炕卓が炕の上に見える

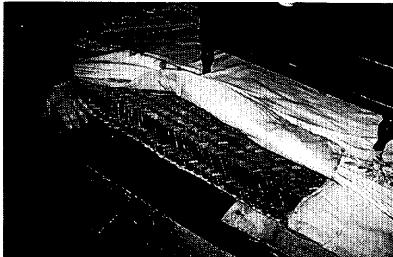
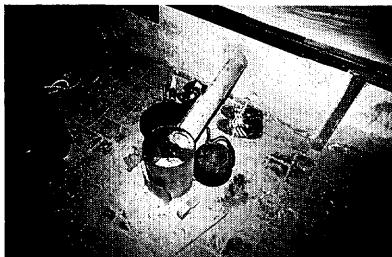


写真 50 炎席・敷物をはがしてもらうと、その下に伝統的な葦で編んだ炕席が見える。一番上に敷いているのは薄い敷き布団。本来なら炕の上に敷き布団を昼間も敷きっぱなしにすることはないが、寒いのと、炕席の汚れを隠す意味もあって、こうしていると考えられる



戸来ている。

日々の礼拝は二人で行つてゐる。主麻礼拝には四～五人が来る。三大節日には三〇余人が集まる。宗派は「老教」で、（遼寧省では）九割が老教とのこと。葬儀は土葬が認められ、山に回民公墓がある。

イスラム教協会は、県レベルではなく、（この点は明確に聞かなかつたが、県内に清真寺が一つしかなく、アーホンも一人では、協会もあり得ない）代わりに、県民族事務委員会（略称民委）が宗教事務を管轄している。民委からの補助金は、年間一二〇〇元で、運営経費にある。ほかにアーホンの給料として、一二〇〇元（月一〇〇元）支給されている。このほか、行事があるごとに、アーホンには多少の臨時収入がある。清真寺そのものの管理運営は、「清真寺イスラム管理委員会」のメンバー五人が管理運営している。

屠殺場は南雜木にある。県内には回民企業はない。清真食品は沈陽から購入する。回民食堂は二軒あるのみ。

アーホンの出身が山東省ということで、寝泊まりしている炕には、山東北部の習慣という、別に横に付けた竈が作られていた。この建物は一九七三年に建てられ、アホーンは一九九六年に来たわけだから、恐らく、それ以降、竈の構造を使い慣れた山東式に改造したものだろう。もう一つの炕は普通の形式だったことからも、後から改造した可能性が高い。

#### 四 劉家における炕とその使われ方

劉家村は、通称は劉家だが、正確な行政村名は、劉漢村（漢族）と劉鮮村（朝鮮族）の二つからなる。劉漢村の漢

族は、二〇〇余戸、劉鮮村の朝鮮族は、一五〇余戸のこと。

郝国敬（漢族）

今回の調査の中では、唯一の漢族の事例である。家族構成図の如く、四世代に渡る一家七人。炕は東側の部屋に南北二つ、西側の部屋に一つある。家族数が多いせいか、この家では興味深いことに、炕の他に木製のベッドを置いていることである。夏はむしろ通気性がよくて好都合だが、真冬だと木製ベッドでは床が寒いと思う。

また、食事は、これも人数の多いことと関連しているかもしれないが、炕卓ではなく、地卓を使っている。

炕卓は家はあるが、食卓としては現在は使っていない。倉庫におき、麺を練る台として使っているという。その代わり、食事には、一〇年ほど前、一九八一～二年ころから、円形の地卓を使い始めた。地卓は二つある。食事は、夏は当然のこと、冬も炕のうえではなく、地卓で食べている。但し、朝と昼、夜によつて食べる部屋が違う。即ち、朝と昼、および来客の際には東側の部屋で、夜は大きなテレビのある西側の部屋で食べる。来客による部屋の使い分けは、後述するように漢族の東側を上位とする習慣に合致している。逆に言うと、この家にとって、西側の部屋の方がより家族のためのプライベートな空間になつていているようである。

子供らは、学校に出かけたりするので、炕に座つて炕卓を使いたがらない。昼、昼食に帰つたときにも、炕には上がらず、炕沿に座つて、地卓で食べる。

このように、若い人は、靴を脱ぐのも面倒なので、炕の上に上がりたがらない。それに、地卓が普及しだしてから、子供達もあぐらをかく習慣がうすれ、学校に行き始める年頃には、あぐらをかけなくなつてゐる。

図15 郝国敬宅の間取り

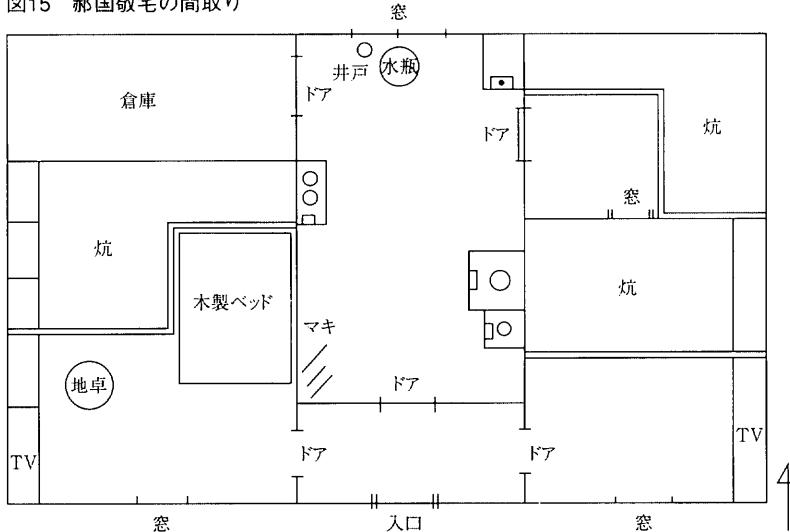


写真 52 郝国敬宅の全景



写真 51 劉家の遠景



写真 54 入り口側から見た厨房



写真 53 庭に作られた、夏用の竈



写真 56 東側の奥の部屋

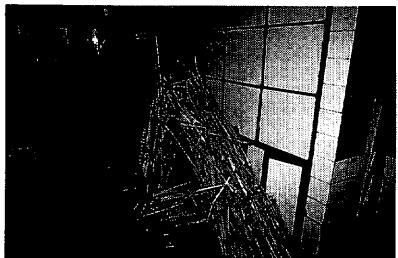


写真 55 窓の脇に立て掛けられた燃料。コーリャンと思われる。



写真 58 東側の奥の炕の竈。上に竈神の張り紙が見える



写真 57 東側の手前の部屋

しかし、五〇歳以上の年齢の人や、年寄りは炕の上であぐらをかくのに慣れているので、地卓で食事もするが、従来通り、炕にあがつてあぐらもかく。もし、今後家を建て直すとしても、炕は作るつもりだという。

この家庭には、夏の間に使う、竈が壊されずに残されていた。家族数が多いので、未使用的の炕のある部屋がないため、恒常に夏は外の竈で調理するためであろう。



写真 59 西側の手前の部屋。右側に座っている老人は炕ではなくベッドの上に座っている。折り畳み式の丸い地卓がみえる。夜は家族がこの部屋で食事する。その際には、炕沿に座ったり、椅子に座ったりして食べる。

## 馬鳳植（朝鮮族）

先の漢族の郝国敬氏が連れて行つてくれた。馬氏の息子は韓国で働いているという。現在は夫婦と孫一人との、三人暮らし。

家は一六年前の、一九八三年に建てた。漢族の影響で、本来の朝鮮族のような大きな炕ではなく、地面の部分が広くなっている。

立て直す前の家は、入り口だけで、あとは一面、炕だった。なぜ、炕を小さくしたのかとの問い合わせに、昔は入り口で靴を脱いですぐに炕にあがり、そこでくつろぐのが習慣だったが、息子夫婦が、漢族のように小さくした方がいいと提案したという。それでも親夫婦は、家族の交流をはかつたほうがいいと、大きい炕を主張し、最終的に現在のような大きさになつたという。これは伝統的な朝鮮族のものよりは小さいが、漢族のものよりははるかに大きい。実際、この家の炕は、これでもこの村で一番の大きさだという。

建てた当初は、炕の部屋に、「拉門」（引き戸）があつて二間に分かれていた。これは当時、祖母が存命だったためで、祖母はこの奥の部屋で寝ていた。その後、祖母が亡くなり、子供も多く不便になつたので、四、五年前に取り壊した。但し、当時使っていた奥のもう一つの戸はそのまま残されている。

来客がある場合、男の客は炕の奥に座る。女の客は炕沿側に座る。

寝るときは、現在は三人家族なので、炕沿側に頭を向けるように

して、竈に近い方から、主人、孫、妻と寝る。**【図17参照】** 来客で人数が多いときには、多くの布団が敷けるように横に並べることもある。この場合、頭は竈とは反対側になるし、炕沿側にまくらを置くことにはならない。も

図16 馬鳳植宅の間取り

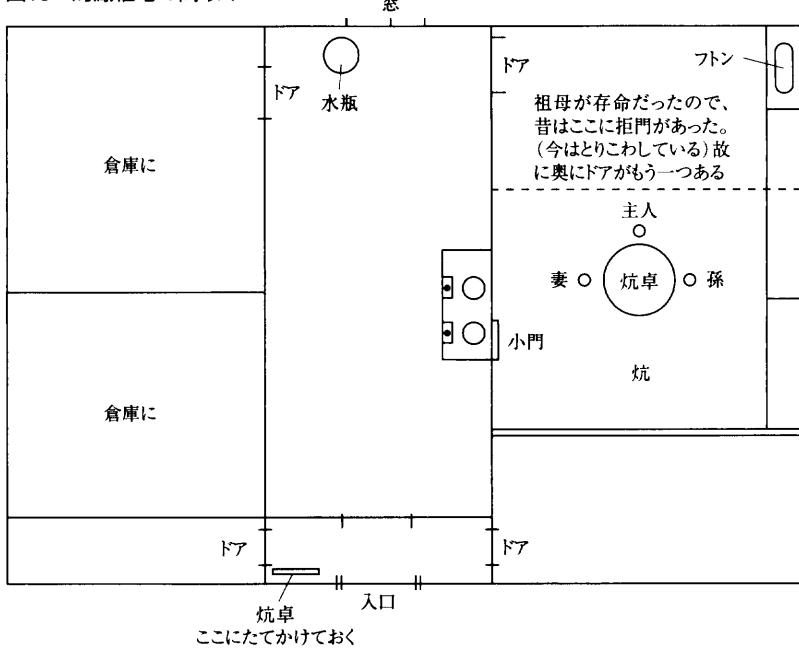
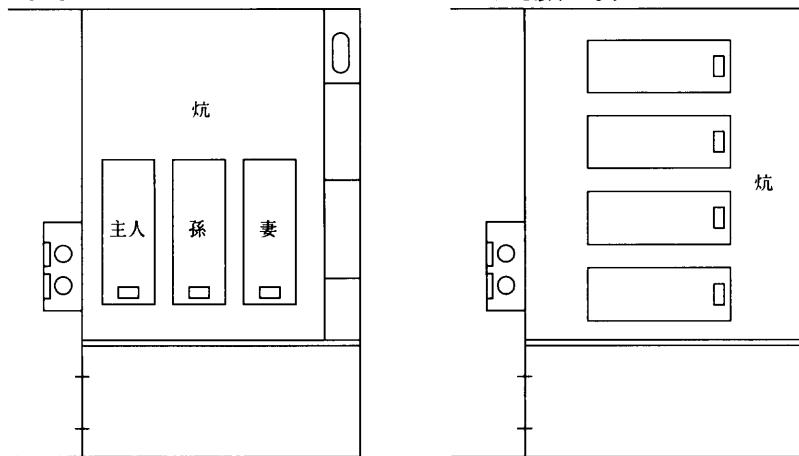


図17 炕の上の布団の敷き方

現在は、3人なので、このようにフトンを敷いている

客がきて、人数が多い時にはこのように横にフトンを敷くこともある



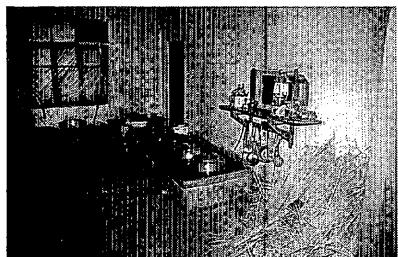


写真 61 入り口側からみた、現在使われている部屋の炕の竈。竈の右手側に料理を運ぶ「小門」が見える。手前には燃料の藁（ワラ）が見える



写真 60 入り口から入って右側の炕のある部屋でくつろぐ家族。主人はあぐらをかいている。奥に、丸い炕卓が見える。その左側にもう一つの扉が見える



写真 63 タンスの上に畳んで積み上げられた布団。タンスは、朝鮮族の場合、このように、上側に開く漢族と違って、蓋が手前側に開く

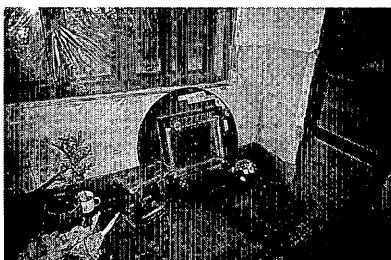


写真 62 使われていないもう一つの丸い炕卓がたてかけてある



写真 65 味噌の元であるメッシュを発酵させているところ



写真 64 まくらは戸棚の中にしまわれている。朝鮮式の角張ったまくら

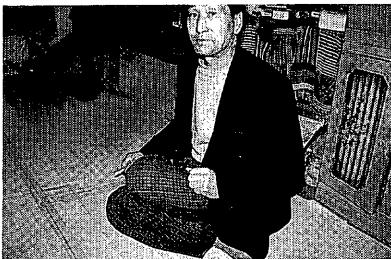


写真67 ヤンバン座りをしてもらっているところ。これはあぐらをかいたあと、さらに両足を狭めていって、下の足の膝の上に、上の足の膝が重なるまでにする。上に来る足は左右どちらでもかまわないと言う。これはかなりきつい体勢で普通の人が出来る姿勢ではない。朝鮮族でも男しか座らないという

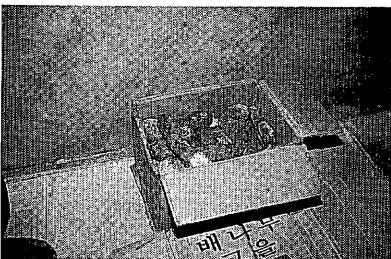


写真66 味噌の元であるメジュ。(大豆をゆで、丸めてくずし団子状にし、暖かいところに置く。大豆の中で、自然発酵する。昔は藁で包み、つるしたりもした。藁で包まない場合は、炕の上に置いた。約2ヶ月で甘くなり、これをメジュ(醤塊)という。これに塩と湯を加え、さらに2ヶ月ほど発酵させると、味噌が出来る。この味噌の元は、1年に1回、12月に作り始める。

し、炕頭側にまくらを置いたら、頭が熱くて寝られないと言う。頭は冷たくても足先が暖かい方がよく寝られる。

家には、低い円形の炕卓が二つあり、一つは當時炕の上に置いてあるようだ。広い炕なのと、家族も三人と少ないのでじやまにならないのだろう。もう一つはたてかけてある。別な人の話によると、この家には一人用のトクサン(独床)もあるという。

炕が広いということだけではなく、夫婦の人望もあるが、この家は村の人々の、「三八婦女節」などの集まりに良く使われるという。炕卓も二つあり、食器もたくさんあるので、これを並べれば、三〇人は部屋の中に坐れるといふ。白紅事(葬儀や婚礼)の際には、厨房の土間も使う。このように、村の中心になつている。但し、集まるのは基本的に朝鮮族で、漢族は近所のものに限られるという。

考察

上述の各事例を一覧表に整理したものが、下の表である。（一は存在しないのではなく、未確認の意味）以下、炕や炕卓をはじめ、文化変容や民族間関係など、調査から読みとれるさまざまな問題点について考察していきたい。

村名	氏名	(民族)	家族	房間
永陵鎮 老城村	潘德利 高振海	(滿族) (滿族)	5 4 5	
新賓縣城 清真寺	禹鏡沢 任志有	(朝鮮族) (滿族)	1 2	
大河東村 旺清門鎮	禹玉祚	(朝鮮族)	— — 2 3	3 2 3
馬鳳植 (朝鮮族)	丁安海	(漢族)	1	
3	7			
3	3			(5)
大炕 + 小炕	南北炕 + 小炕	山東式	大炕 + 小炕 大炕 吊炕	万字炕 + 小炕 小炕 万字炕 + 小炕
円形 + 円形 + 独床	長方形 (練り台に)	長方形	長方形 (旧) + 方形 (新)	円形 (無) 方形 (無)
(無)	円形 + 円形	(無)	— — (無) (無)	円形 (無)
藁	—	—	— — — 藜	薪 薪
				燃料

## 一 焗の形状と名称

炕には地域や民族によつてさまざまなバリエーションがあり、名称も複数ある。ここでは、新賓県内で実際に目にした、漢族・満族・朝鮮族それぞれの炕の形状と名称を整理しておきたい。

漢族、および満族の家屋の場合、小さな家でない限り、炕は、南側と北側に二つあることが多い。通常、家の入り口は南に面しており、入り口側の南にある炕を「南炕」、北側のを「北炕」という。これを合わせて「南北炕」もしくは「対炕」という。

小さな家で南北炕のスペースが無く、一つしか炕を作れない場合は、例外なく、南側に炕を作る。逆に、大きな家で、南北炕のほかに、もう一つ別な部屋に炕を作る場合は、通常は南側に作るが、部屋の間取りの関係などにより、北側に作る場合もある。

炕が南北に二つなく、一つしかない場合は、南炕、北炕という言い方はしない。また、南北炕のほか、三つの炕を呼ぶ場合には、西屋小炕、東屋小炕などという言い方をし、三つ目の場合でも、南炕、北炕という言い方はしない。

炕の高さは、漢族、満族とも高めで、六五、七五センチほどある。但し、漢族と満族の炕の決定的な差違は、漢族の南北炕がそれぞれ独立している（従つて竈と煙突も二つある）のに対し、満族のは、南北炕が「匚」の字型に繋がつている。こうした炕を、万字炕と呼ぶ。なぜこう呼ぶかは聞いても明確な理由は分からなかつたが、「万字」とは卍のことと、二つの炕が繋がつてゐる形が似てゐるからではないかとの説明を受けた。

万字炕は、熱効率を上げるため通常は二つの竈があるが、煙突は一つでかまわない。こうしてみると、万字炕は南北炕の煙突を一つですませるための工夫とも考えられる。もつとも、この繋がつていてる部分（後述の文献では西炕と呼ぶとのこと）は幅一メートルもなく、実際にはその上に家具を置いていることが多く、一見しただけでは気がつかない場合が多い。

満族でも家屋の構造で南北炕ではない家もある。それゆえ、満族だつたら必ず万字炕があるというわけではなく、これは満族としての必須な民族指標とはなつていらない。逆に漢族が万字炕を作る場合も、調査地では見かけなかつたもの、皆無ではないとのことなので、これをもつて満族か否かを断定することは出来ないようである。そもそも、後述するように、満族と漢族の関係というのは、数世代に渡つて混血も進んでおり（例えば祖父や祖母に満族の人がいるなど）、単純に割り切れるものではない。

一方、朝鮮族の炕はより特徴的である。まず、炕の面積が大きく、高さも四五センチほどと、漢族や満族のものよりは低くなっている。炕沿も、漢族が直線、満族の南北炕の場合がコの字形なのにに対し、朝鮮族のは、直線の場合もあるが、伝統的には靴を脱ぐところだけ凹型になつていた。近年は漢族の影響で地面の部分を増やして、L字型になつてている例もある。

それでもまだ漢族に比べたら大きな炕であり、このため、単に大きな炕という意味で、「大炕」もしくは、東北大方にみられる大きな炕という意味で、「東北大炕」という言い方をすることがある。また床一面に炕があることからが、「一面炕」とも呼ばれる。

もう一つ朝鮮族の家屋に特徴的なことは、竈のある厨房と炕の部屋との間に、料理を移動させる、引き戸のある小窓（中国語で「小門」）がついていることである。従つて朝鮮族の炕は、その低さと面積、炕沿の形、そしてこの

「小門」が指標となつてゐる。

なお炕は朝鮮語でオンドル（温突）という。この名称はもちろん、朝鮮語のできる人であれば知つてゐるが、日常の会話では漢語のカン（炕）を使うことが多いといふ。とくに漢族や満族と雜居してゐる村では漢語が共通語となつてゐるので、この傾向がつよい。たとえ朝鮮族どうしが朝鮮語で会話をしても、「炕に上がりなさい！」と言うとき、「カンエオツラカヨー」と言うなど、カンは朝鮮語の語彙のなかに入り込んでいるとのことであつた。

このほか、旺清門鎮の禹玉祚（朝鮮族）で、「吊炕」と呼ばれるものを見せてもらつた。これは一九九〇年の初めころから東北地方で流行してゐる新しい炕の様式で、炕の底を上げ底にし、煙が通る空洞を狭めている。この結果、少ない燃料でより多くの暖房効率を上げることが出来るといふ。底をあげる高さは、五センチくらいから二五センチくらいと、家によつて幅がある。高く上げ底にしてゐる家では、その隙間に靴をおいたり、箱の収納に利用している。

吊炕がいつからどのように普及したのかはよく分からぬが、これは特定の民族に限られる様式ではなく、むしろ民族の枠をこえたレベルで普及してゐるようである。調査時に朝鮮族のお宅で初めて見たが、この場合、民族の差違は重要ではなく、むしろ鎮ゆえに、農村部ではまだ見かけない流行の吊炕があつたと考えられる。

調査から僅か二ヶ月後の、一九九九年五月、老城村は、觀光開発の一環としてヘトアラ城を再建することになり、全村が付近の低地に移転した。訪ねた村は取り壊され更地になつた。新しい家も平屋で、炕ももちろん作られたが、全ての家が近年流行してゐる、吊炕に作り替えられたとのことであつた。

## 二 満族の伝統的な炕について

調査後、二〇〇一年に刊行された、佟悅著の『関東旧風俗』という本を入手した。この中に、「万字炕和地炕」と題された、満族の伝統的な炕に関する記述があるので、以下、要点を紹介したい。また、楊英傑の『清代満族風俗史』（一九九二）にみえる炕の記述も、補足の意味で紹介したい。

東北の炕の歴史は少なくとも千年以上あり、その傍証として佟悅は古書の記述を引用している。古書の出典は明記されていないが、遼金時代、この地に住んでいた女真族（満族の祖先）は、「環室穿木為床、煴火其下、飲食起居其上」であったとのこと。「環室」という表現から、佟悅は、炕は当時から室内に一方向にだけあつたのではないかと解釈している。そしてこれが発展して、後の満族の特徴的な、南・西・北の三面が連続した「轉圈炕」「拐弯炕」、民間で俗に呼ばれている「万字炕」「弯字炕」となつたとしている。こうしてみると、万字炕というのが俗称であつたことが分かるし、「万」の字は発音が同じことから、「弯」（曲がつたの意味）の字の当て字ということが想像される。

かつて、満族の住居は一般に「口袋房」と呼ばれる形式で、家の扉は真ん中ではなく、東側にあつた。扉から家にはいった部屋は竈房（台所）で、西側に居室が二連、三連と連なつていた。室内の南北炕と家屋の長さとが同じになるため、俗に「連二炕」「連三炕」などと呼ばれた。（**写真68** を参照）。居室の間には仕切が見えない）炕は起居や寝台となつたため、炕面の寛さは五尺余あり、「南北大炕」「対面炕」などとも呼ばれた。正面の西炕は比較的狭

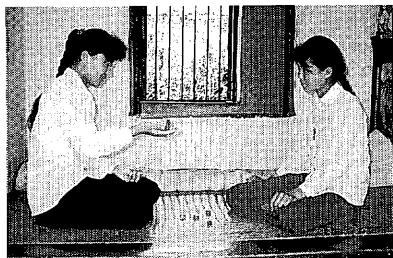


写真 69 満族の伝統的な遊び「嘎拉哈」(ガラハ)をしているところ。詳しくは註2を参照。劉正愛氏が新賓県上夾河鎮腰站村にて一九九三年に撮影

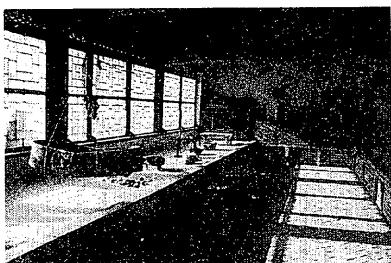


写真 68 伝統的な満族の口袋房と連二炕『関東旧風俗』より

く、物を置くのに使われた。炕と炕との間の空地は、「屋地」と称される。実際上、室内の大半の平面空間は、炕によって占められるため、人々の室内での生活は主に炕の上でなされた。客が訪ねてくると、先ず炕の上に座らせた。毎日の食事も読書も物書きも炕卓の上でなされた。子供たちの「嘎拉哈」「彈杏核」「翻縄（俗に「改股」）」などの遊びは、みな炕の上でなされた。（【写真69】を参照）

満族の伝統的な家屋構造については、楊英傑の『清代満族風俗史』でも紹介されている。即ち、満族の家庭の居室は一般に、三間か五間で、南向きである。三間の場合、多くは一番東側の一間の南側に入り口が設けられ、五間の場合、東から二間目の南側に入り口が設けられた。これらの形がポケットに似ているため、俗に「口袋房」と称される。三間、あるいは五間の部屋で、入り口がある部屋を間に挟んだ左右の部屋を俗に「対面屋」という。入り口のある一間を「外屋」と呼び、厨房となつていて、その西側（口袋房）、あるいは左右両側（対面屋）の部屋を「里屋」と呼び、寝室となつていて、三間の場合、外屋には一般に南北の二カ所に竈があり、その煙が炕の中を通る、とある。

こうしてみると、「家の扉は真ん中ではなく、東側にあつた」と言う悠悦の記述は説明不足で、東側の間の南面にあつたとすべきである。また、口袋房と

いう俗称は、本来は外屋からみて奥まつた部屋を指す言葉であったのが、家屋全体をも指す名称となつたことがわかる。また、外屋と里屋（その中には口袋房・対面屋などが含まれる）の対立など興味深い名称も知ることができた。

楊英傑はまた、万字炕についても言及している。即ち、里屋には南北に対面炕があり、西側の部屋の壁側には南北両炕をつなぐ細い炕があり、南西北の炕が「コ」の字形になつていていることから、俗に「万字炕」とよばれ、満語では「土瓦」(tuwa)と呼ばれる。炕は一般に、寛さ六尺、高さ一尺五寸、長さ二丈五、六尺で、二間の炕がつながつていたため、俗に「連二炕」と呼ばれた。炕は日干しレンガを組み立てて作り、その上に泥を塗る。地区によつてはそこで生産される石版を炕面に用いていたが、石版の上にも泥を厚く塗つた。これは隙間を埋めるためと、炕が急に熱くなつたり冷めたりするのを防ぎ、常に恒温を保つためであつた。炕の縁には光沢のある木で縁取りして、炕沿とした。炕の上には席を敷いたが、裕福な家では席の上にフェルトを敷くこともあつた、と。

こうしてみると、万字炕といつてもそれはあくまで漢族からみた名称であつて、満語では「tuwa」と呼ばれていたことが分かる。滿族が自分たちの特徴的な炕を「万字炕」と呼ぶこと自体、すでに漢化されていると言える。炕面の寛さを佟悦は五尺余、楊英傑は、六尺、高さ一尺五寸、長さ一丈五、六尺としている。多少のバリエーションは存在していくだろう。炕の寛さは、これは市尺（三尺で一メートル）であろうから、五尺で一七〇～八〇センチに相当する。これだと大人が横になつて寝られる長さであり、今日の満族の幅とさほど変わらない。また、地方によつては石版を使つていたこと、裕福な家では席の上にフェルトを敷いていたことなどが興味深い。

佟悦は、室内の大部分の平面空間は炕によつて占められたとしているが、朝鮮族のような大きさではなかつたであろう。但し、今日では見ることのできない「連二炕」「連三炕」は、相当の長さで、圧巻であつと思われる。正面の西炕の使われ方は現在も同じである。なお、この部分を「西炕」としているが、調査ではこの部分の名称を聞き

そびれてしまつた。これが民俗用語なのか、著者が命名したのかは不明。炕と炕との間の空地を「屋地」と呼ぶのは、民俗名称であろう。

万字炕と東北地方の多くの民間礼俗とは密接な関係にある。かつては数世代が一部屋に同居していたが、南炕は日向に向いていて暖かいため、家の中の年長者が使う場所であった。その中でも最も暖かい「炕頭兒」（竈に近い側面）の位置は、家の中の最年長の者が、あるいは尊敬すべき客人が寝るところであつた。北炕は家の中の若輩者か、糧食を乾かすのに使用したりした。西炕は一般に人が使うことなく、満族の家族にとっては特別な場所であつた。なぜなら、西の壁の真ん中は、家の「祖宗板」（祭祀神位）を安置するところであり、（写真70）を参照）西炕の上には祭器供品のみを吊し、雑物をみだりに置いたり、勝手に足で踏みつけたり、腰掛けたり、寝たりすることは許されなかつた。

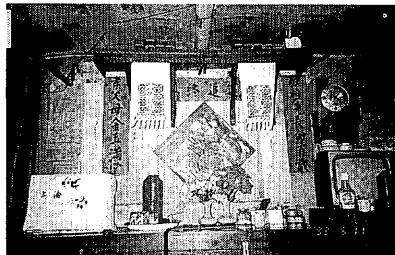


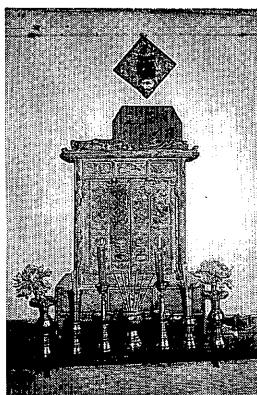
写真70 満族の伝統的な「子」（祭祀神位）。「祖宗板」（祭祀神位）は、西の壁の真ん中に吊すように置かれる。祖宗板は「老」（木で作られた灰を置く器）とも呼ばれ、このように台の上に置かれ、これは香碗（木で作られた灰を置く器）とも呼ばれる。劉正愛氏が新賓県上夾河鎮腰站村にて一九九三年に撮影

満族と漢族とで上位とする方向が異なること、および祖先の位牌を西側の部屋の万字炕の西側に置くことは、後でも触れるよう、調査でも聞くことができた。しかし、この記述により、調査では聞けなかつた宗教的・歴史的な背景などの詳細がわかり、疑問点も水解した。調査地で万字炕のあつた二つの事例では、「祖宗板」（祭祀神位）を吊していることはなかつたが、家具類は置かれていた。

写真71 「堂箱」の上に、ウソク台。その後ろに龍口ウソク台。その奥には「祖宗合祀位」。但し、この満族には正規制度（八旗漢人）と異なった結果、漢族本筋では「八旗漢軍」（八旗漢人）が主導的だった。この点に注目。この点に注目。この点に注目。

「堂箱」の上には、西炕の長さと同じ「堂箱」（別に「鍋箱」という）を置き、糧食や衣服を保管する。箱の蓋の上に、香炉、ウソク台などのお供え用の器具（写真71 参照）、およびはたき立て、帽筒、置き時計などの日用品を置いた。

炕の主要な機能は暖をとることにある。しかし、炊事の際に竈を使わなければ、炕は暖かくならない。冬の寒さに対処するため、家によつては、室内の地面の下に煙道を造つてあるところもある。これを「火地」あるいは「地炕」といい、特に寒い季節には通常の炕のほか、「地炕」を焚いて室温を上げる。外がどんなに凍り付くよう



かつて、東北地方の多くの家では、息子が嫁をもらうと、父母と一緒に同居した。そこで不便を避けるため、通常、二間、あるいは三間の居室の間を（写真68の）如く、二間といつても仕切がない）、木板に紙を貼つて作った

「軟間壁」でもつて、炕面から梁までの仕切とし、二つの空間を作つた。なかには、可動式の仕切を作り、昼間は撤去し、夜寝るときに設置するというのもあった。この他、炕沿と平行する上部にこの仕切から「幔竿子」と呼ばれる、一本の長い竿を通して、ここから幕を掛けることもあった。夜寝るときにこれを降ろし、頭部に冷たい風が当たるのを避けることができたほか、南北炕の間を遮断する作用もあった。

家具などの配置も万字炕の構造と対応している。南北炕の炕梢（部屋の壁側、即ち炕頭の反対側）側には、炕炬を置き、その上に布団や枕などの寝具を重ね置くが、これを俗に「被格」（被は布団の意、格は格納の意）と

【参考】  
上夾河鎮腰站村にて一九  
九年三月に撮影

な寒さでも、室内の炕面と地面とが同時に発熱するので、まるで春のような暖かさになる。

現在では居室は全て壁で仕切られているため、「軟間壁」でもつて部屋を仕切るようなどはない。一方、家具類の置き方は、現在でも基本的に同じである。「炕柜」という総称は、調査でも聞いていた。調査で聞いた、タンス類の名称としては、「衣柜」「套柜」などがあつたが、これに、布団類の総称として「被格」というのがあつたことになる。また、また西炕の上に置くものとして調査でも「座箱」という名称を聞いていたが、これに「堂箱」「船箱」などの名称が加わることになる。こうしてみると、西炕の上に置くものは全て「箱」の字となつていて、神聖な場所であるためか、この上には布団は置かないようである。もつとも毎日の布団の上げ下げの手間を考えたら、西炕よりは、寝泊まりする炕の端に布団を置いたほうが便利という、実用的な理由も考えられる。

「地炕」を実際に作っている例は、調査地ではみたこともないし、聞いたこともなかつた。より寒さの厳しい、黒竜江省あたりでは現在でも使われているのかも知れない。いずれにせよ、地面をまるごと温めるというのは、床全面を暖房する朝鮮のオンドルに通じていて、その起源を考える上でも興味深い。

### 三 炕の構造、各部の名称、燃料と管理方法

#### 炕の構造

【図18】は、清真寺での書き書きから、炕の内部構造を再現したもの。（できれば床をはがした实物を見たいところ）

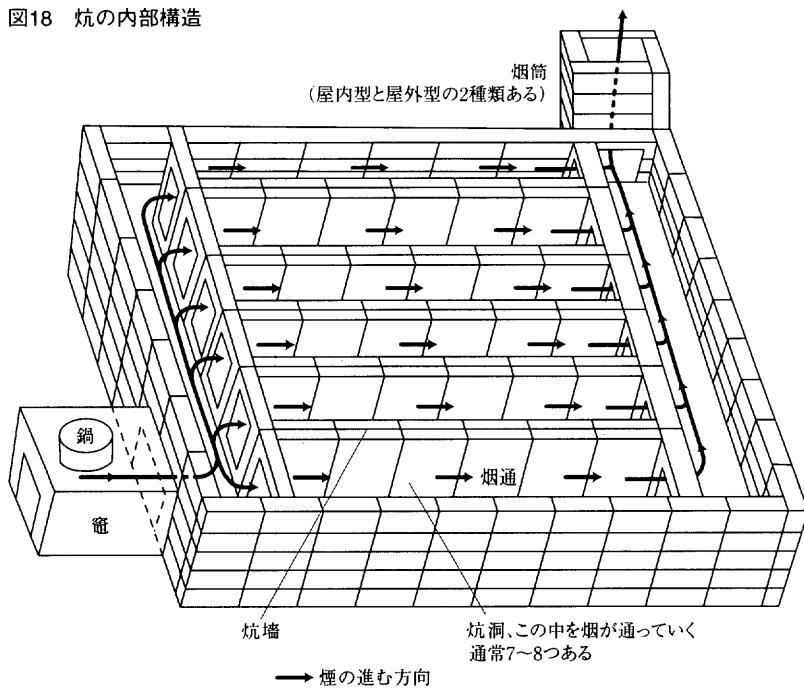
ろだが、これは数年に一度しか行わないで、実際に見れる機会は滅多はない。）この上に煉瓦を乗せて蓋をし、隙間に土をぬって、完成。煉瓦を積み上げた作った壁を、「炕牆」、煙の通る通路を「炕洞」という。「炕洞」は、通常の大きさの炕で、七～八個ある。

### 炕沿

木製の縁を「炕沿（児）」という。ここには良く腰をかけるので、煉瓦ではなく、木製の縁が張られている。炕沿の木は、まな板と同じ、榆（ニレ）の木を使う。なぜ榆の木なのかと聞いたところ、特に堅い木というわけではなく、東北地方によくある最もポピュラーナ木だからとのこと。

清真寺で聞いたときには、炕沿の材料としては、樺木（白樺）が九割、残りは梨木（梨）のこと。清真寺のアーホンは山東出身なた

図18 炕の内部構造



め、おそらく山東では、白樺の木がボビュラーなものと考えられる。

### 炕の燃料

炕を焚くことを中国語で、「焼火炕」「焼土炕」という。その燃料としては、薪のほか、藁（ワラ、「稻草」）やコーリヤン、トウモロコシの茎（「包米稈子」）などがある。

老城村の潘德利（満族）宅では、燃料は薪で、二〇〇元～三〇〇元（単位は一年）かかる。山に入つて取るのは自由のこと。この家では、ほかにプロパンガスもあつた。同じく満族の高振海宅（満族）では、薪は、太いのは永陵劈柴市場から買つてくる。値段は潘德利宅と同じ二〇〇～三〇〇元。生活が豊かであれば、より多くを購入に頼る。細い薪は、山から自分で取つてることだった。芝刈りに行くのを「上山砍柴」という。

一方、旺清門鎮大河東村の禹鏡沢宅（朝鮮族）では、主な燃料は藁のことであった。（写真61参照）夏の炊事について聞いたら、米を炊くだけなら、燃料が藁のためそれほど熱くもならないので、夏でも屋内の竈を使うとのことであった。実際、朝鮮族の幹部との話しでも、薪を取つたり、買つたりしなくとも、秋から春にかけては、イネの藁やトウモロコシの茎、コーリヤン（写真55 参照）などで、十分足りるという。

燃料の藁は、写真には撮らなかつたが、庭に山積みされている。冬、雪が降つても藁の山の中の方は濡れていないので、中から抜いていく。湿つていると煙が多くなるので、雨の日は、あらかじめ多めに部屋に入れておく。

これらはともに農家だが、主な燃料の違いは、農作物の違いや、地理環境の差から来るものと考えられる。もちろん、大河東村でも薪を焚かない訳ではないし、老城村でも藁を焚かないわけではない。要はどちらが主な燃料となつてゐるかの問題であろう。また、これには藁の欠乏する季節も関係しようし、商品としての薪を購入できるだけの経

済力も関係しよう。

なお、炊事用のプロパンガスはこの数年の間に普及し出した。実際、私が訪問した家々では、皆、プロパンガスも備えていた。鎮では、石炭も入手できる。プロパンガスは、農村部の全戸に普及しているわけではないが、県城内であれば、現在、全戸に普及しているという。

### 焚く時間

老城村の潘徳利（満族）宅では、炕を焚くのは、一日二回、朝夕の食事を作るときで、朝食は四時ぐらいに作り始める。夕食は五時半から六時で、夜は八時か九時には寝る。このように、炕を焚くのは、炊事に合わせて、一日二回というのが普通である。

また、寒い夜であれば、夜寝るときは、竈にぬかを入れておけば、朝まで暖かい、とのことであった。

県城の旅社では、竈は全部で三つあり、炕の火を焚くのは、午後二時に一度だけとのこと。これだけで夜までずっと暖かいという。燃料は薪と石炭。旅社の場合は炊事はプロパンガスで行っているようで、竈に火を付けるのは客室の炕の暖房のためだけのようである。一日一度で午後の二時にしか焚かないのは、午前中は客がではらつて暖房の必要がないからであろう。

### 管理

溜まつた灰を取ることを、「掏炕」という。完全に燃焼しない場合もあり、必要に応じて、一、三年に一回の割合で、これを行う。この際、炕の蓋の部分を壊す。これを「揭露」という。蓋をこわして掏炕を行った後、また蓋をか

ぶせて修復する。これは、当然、暖房施設として使用しない夏の時期にする。

### 炕席（炕の上の敷物）

本来、伝統的な炕席は、葦を平らにして編んだムシロであった。その後、「纖維板」（ファイバー・ボード）と呼ばれるものが作られるようになつた。これは「鋸末」（のこぎりの切りかす）を加工して板状にしたもので、この上に紙を張り、ペンキを塗つた。黄色の光沢がある。ところが一五年くらい前から、ビニール製のシートが使われるようになつてきた。従つて、現在ではこの「纖維板」もほとんどなくなつてゐる。ましてムシロの炕席は非常に珍しくなつてゐる。

従つて、旺清門鎮の禹玉祚（朝鮮族）宅で、葦の炕席の新品を見ることが出来たのは幸運であつた。清真寺のアーホンの寝泊まりしている部屋に、かなり使い込んだ、これと同じ素材の炕席が敷いてあつた。大切に使えば、一〇年以上はかるく持つといふ。

炕はおしりを暖めるだけの暖房設備ではない。炕の床と部屋全体を暖めるもの。それ故、炕の上には基本的には敷き布団などを置かない。冬の寒いときに掛け布団を脚にかけることはあるが、あくまで掛け布団で敷き布団ではない。敷き布団を敷いてしまつたら、部屋全体を暖める効果が減少してしまうといふ。

### 炕の上での上座、下座

漢族（満族も含む）では、竈に近い方を炕頭、離れている方を炕梢と呼び、より暖かい炕頭が上座となつてゐる。来客があつた際には、炕頭に座らせるという具合である。実際、客に炕の上に座るよう進める場合、「到熱炕頭坐一

坐！」と言つたりする。

もつとも、家によつては、それほど厳格な上座下座の意識がないところもあるようである。もちろん、炕頭、炕梢の言い回しは使うものの、実際にどこに座るか、寝るかは、その時の情況によつて変わると話してくれた人もいた。實際、夏であれば、炕を焚かないでの、温度差による上座下座は意味を成さなくなる。こうしてみると、炕頭、炕梢の区別は空間と方位によつて決定された上座ではなく、あくまでより暖かい、という機能的な理由で決められていると考えられる。

ところが、朝鮮族の家（禹鏡沢）で炕の位置の名称と上座下座について聞いたところ、漢族とは逆の答えが返つてきた。即ち、朝鮮族の人でも炕頭、炕梢という漢語は知つてゐるが、それぞれの場所を朝鮮語で何というかと聞いたところ、炕頭に相当する場所を朝鮮語では、アルク（下の方）、炕梢に相当する場所をウク（上の方）、と言うといふ。少なくとも言葉の上では漢族の方向と逆になつてゐる。つまり、上方が上座とするならば、炕梢の方を朝鮮語では上座としていることになる。

實際、朝鮮族の家では、賓客が來ると、ウク、即ち漢族のいう炕梢に座らせるといふ。また、死者が出た場合、朝鮮族は、遺体をやはりウクに寝かせ、枕は生者と同じように炕沿側に置くといふ。遺体を棺桶に納めるのは出棺の直前のこと。一方、漢族はそもそも遺体を炕の上に置くことをせず、死後、遺体の処理を行つたら直ちに棺桶に納め、土間に台を置き、その上に棺桶を置くといふ。

もつとも少ない事例からは即断しかねるし、炕頭・炕梢と上下は別な概念と考えることも出来よう。

朝鮮族の場合、調理した料理を移動させる「小門」が炕頭側にある事とも関係していよう。通常、調理やその運搬

は女性の仕事のため、「小門」に近い方、即ち漢族のいう炕頭が下座になつてゐる、と考えられる。実際、禹鏡沢氏宅では、息子夫婦が住んでいたとき、息子夫婦が調理を担当し、竈に頻繁に出入りしていたため、竈よりものところに息子夫婦が寝泊まりしていたという。

この問題については今後の課題としたいが、概して、漢族よりは人間関係の上下に厳しい上に、炕の上で過ごす時間が漢族よりも多いと考えられる朝鮮族の方が、炕の上での上下に関しては、より厳しい規範を持っていることが予測される。

これと関連して、炕頭は本当に暖かいのか、炕梢との温度差は本当にあるのか、と聞いたところ、実際に炕頭は暖かく、特に火を焚いたばかりだと、むしろ熱いぐらいだという。紙製の炕席などは、よく熱で炕頭の部分が焦げることもあるという。従つて考え方によつては、炕頭は必ずしもベストな場所とは限らず、真ん中あたりがベストではないかとの事であった。

#### 四 炕卓

炕卓には、方形、長方形、円形と三種類あるが、円形のは朝鮮族に多いという。但し、調査結果は必ずしもそれに対応はしていない。訪問した一〇軒のうち、炕卓を持つていなかいか、確認できなかつた二軒を除くと、八軒に炕卓があつた。そのうち、円形のは潘德利（満族）と馬鳳植（朝鮮族）の二例だけで、残りは方形か長方形である。長方形の方は小さめで古いものが多く、禹鏡沢（朝鮮族）、任志有（満族）、禹玉祚（朝鮮族）、丁安海（漢族）、郝国敬（漢族）宅と五例あつた。正方形のは大きめで新しいものが多く、孫友（満族）、任志有（満族）、禹玉祚（朝鮮族）

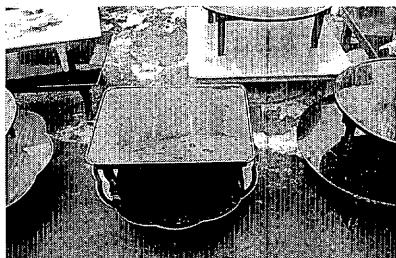


写真73 奥の方は漢族式の方形や円形の炕卓が置かれているが、手前には、明らかに朝鮮式の意匠のバブサンが置かれている



写真72 沈陽の西塔朝鮮人街にて。露天商が、各種の炕卓を売っている

宅の三例にとどまっている。このうち任志有（満族）、禹玉祚（朝鮮族）は旧式の長方形と新式の正方形とを併用していた。なお、馬鳳植（朝鮮族）宅には小さな朝鮮族のトクサン（独床）があった。

限られたデータではあるが、こうしてみると、旧式の長方形の炕卓が最も多く使われ、ついで新式の大きめな正方卓が、ついで円形の順、となつていて。また卓の形状と民族との関係には、朝鮮族のトクサンを除き、強い相関関係は認められない。それよりも、流れとしては小さめの長方形の卓から、大きめの方形や円形の卓に移行していること、そして割合の差はその移行におけるフェイズの差、と解釈することが出来よう。

炕卓の形状の変化に関して興味深いのは、朝鮮族幹部による、変化の理由の説明である。即ち、朝鮮族の場合、以前は長方形が多かつたが、一九七〇年代以降、正方形が多くなった。その理由は、「請客」（客を食事に招くこと）の際、漢族は最低八つの皿を出すが、この影響を受けて朝鮮族も料理の数が増え、小さな卓では不便なため、大きめの正方形になつた。また、円形の炕卓も、一九七〇年代以降、同じような理由で普及しだしたという。

農村部では、今も昔も、農村部では炕卓を売つておらず、必要な場合は村内か村外の木工に頼んで作つてもらう。大連で話をした若い人（二〇台前半）の中に、丹東からきた満族の人があった。炕卓について聞くと、炕卓は、自分の村では、木

工などには頼まず、家で父親が作っていた。簡単に出来るもので、昔は貧しく、皆、自分で作つたものだという。今もそれが残っているという。私が購入したものよりも、新しく、大きいという。村にある炕卓には、正方形のものと長方形のもあるといふ。

沈陽の西塔朝鮮人街にて、露天商が、各種の炕卓を売つていたので、店の人へ話を聞いた。漢族が使つてゐるものとあれば、朝鮮族の伝統的なものもある。値段は一二〇元～二八〇元。職人が作つた売り物だけに、良く出来ている。実際に買ひに来るのは朝鮮族だけのこと。**[写真72・73参照]**

一つの卓（大きな正方形の卓）のみ、韓国との合弁会社で制作したが、残りは全て、自分たちで設計し、沈陽で作らせたという。

## 五 炕の上での座法

炕の上での座法について、県の幹部に話を聞いた。中国人の座法には一般に、以下の三つがある。「跪座」は、日本の正座にあたる。単に「跪」といつたら、膝をついてお尻を地面につけず、体を建ててゐる状態を指す。但し、めったにこの姿勢は取らない。「男兒膝下有黄金、上対天、下対父母以外、不輕意跪」とのこと。つまり父母の前と先祖を礼拝するとき以外は、男子はこの姿勢をとらない。「盤座」は、あぐらに相当し、一般的な座法。「伸座」は、両足を伸ばした座り方で目上の者の前ではしない。なお、中国人は、韓国で女性がするような、立て膝はしないといふ。

また、馬鳳植（朝鮮族）氏にも、朝鮮族の座法について聞いてみた。女性の場合、伝統的には、来客があつた場合とか、目上の者に食事などを差し出す場合、右脚の立て膝で行った。正座をするのは、初めての客に挨拶するときなど特別な場合に限られた。日本人が住んでいた当時は、日本の女性は炕の上でも正座をしていたという。現在では、あぐらか、両足を合わせて右側におくなどする。

男性の場合、正座をするのは、やはり祖父母に対するときなど、特別な場合に限られた。男は立て膝をたてることではない。普段はあぐら。五〇年前だつたら、地位のある人やヤンバンの場合、あぐらの状態からさらに脚を狭めて、下の膝と上の膝がクロスが重なるような座り方があった。上に来る膝は左右はどちらでもいい。【写真67参照】両脚を投げ出す座り方は、男の年齢が上ならかまわないと、目上の人前ではしない。

## 六 訪問時の作法

よその家を訪ねた際、どのようなときに炕沿に腰掛け、どのようなときに炕の上に上がるのか、についても聞いてみた。炕の上に上がるか否かは、用件の度合いと、相手との親しさによって変わってくるが、炕の構造が異なる朝鮮族と漢族とでは多少、情況が違うようである。

朝鮮族の炕の場合、家屋と炕の構造の関係から、基本的には部屋に入つたらすぐに靴を脱いで、炕に上がるのが普通のこと。簡単な用件ですぐに帰る客以外は、物理的に、炕の上に上がらざるをえなかつた。それゆえ、炕の高さも、上がりやすいように漢族のものよりは低くなっている。

伝統的な家屋では、土間の部分は、禹鏡沢宅でみたよりももっと小さく、靴を脱ぐだけのスペースになつていた。

（図10・11参照）それだけ、炕も広く、基本的に家の中では一〇〇%炕の上で過ごす。

一方、漢族にとつては、毎回靴を脱ぐのは面倒だし、土間も広いから、長居をする以外は、炕沿に腰掛けることが多い。実際、人の家を訪問すると、炕に上がるまでには、三つの段階がある。まず、門の中に入り、次ぎに家の玄関の中に入り、そして炕の部屋となる。だから炕に上るのは面倒と言えば面倒になる。同行の劉正愛さんも、下放していった際、朝鮮族の家だつたが、靴を脱がなくともいい土間の空間は、便利だつたという。

特に、もめ事などがある場合は、炕の上には上がらないという。（実際、映画『秋菊の物語』ではその通りのシーンが描かれてた。即ち、村長と仲違いした秋菊の夫は村長の家を訪ねた時も、炕に上がるどころか、炕沿に腰掛けもしなかつた。しかし、主人公の秋菊は、生まれた赤ん坊を村長に見せに行つた際、上がりと言われなくとも勝手に炕の上に上がつていた。）このように、遠慮している客に炕の上に上がりと進める場合もあれば、親しい間柄では進められなくとも勝手に上がるようである。そういうえば、老城で訪れた孫友氏宅（満族）では、「上炕吧！ 上炕吧！」と炕の上に上がるよう勧められた。これは勧める相手が炕の上にいてもいなくとも使う表現で、炕の上にいる場合は「上来吧！ 上来吧！」、下にいる場合は「上去吧！ 上去吧！」ともいう。客への勧め方としては、他に「進屋坐！」「到熱炕頭坐一坐！」などともいう。

## 七 地卓による食事

訪問した一〇軒のうち、食事の際に地卓を用いているのは、高振海（満族）と高振海（満族）の二例のみであった。興味深いのは、地卓を使つてゐる家では、炕卓との併用が見られず、完全に地卓に移行してい点である。高振海（満

族）卓には炕卓がないし、高振海（満族）宅では、昔使つていた炕卓は練り台に転用している。また、炕の大きさや依存度と大いに関係があると思われるが、朝鮮族の間では地卓の例が一例も見られなかつたことが注目される。また地卓はいずれも円形で、これは移動する場合に転がせて便利ということも関係していると思われる。

高振海（満族）宅の場合、折り畳み式の円形の地卓を使つてゐる。これを使う場合は、椅子と「炕沿」の両方に座つて、食事をする。終われば、畳んで、立てかける。「地卓」は、「炕卓」に対応する言葉で、他の地方では使われていないと思う。実際の「地卓」は、どこにでもある折り畳み式の円卓である。

郝国敬（漢族）宅は、四世代にわたる一家七人と、人数も多いため、二つの地卓を使つてゐる。地卓を使い始めたのは、一〇年ほど前、一九八一～二年ころからで、夏は当然のこと、冬も炕のうえではなく、地卓で食べている。但し、朝昼夜によつて食べる部屋が違う。即ち、朝と昼、および来客の際には、東側の部屋で、夜はテレビのある西側の部屋で食べる。来客による部屋の使い分けは、後述するように、漢族の東側を上位とする習慣に合致してゐる。この家にとつては、西側の部屋の方が家族にとつて、よりプライベートな空間となつてゐるようである。

炕卓から地卓への移行について聞いたところ、子供らは学校に出かけたりするので、炕に座つて炕卓を使つたがらないという。昼、家に昼食を食べに帰つたときにも、炕には上がらず、炕沿に座つて地卓で食べるという。このように、若い人は靴を脱ぐのも面倒なので、炕の上に上がりたがらない。それに地卓が普及しだしてから、子供達もあぐらをかく習慣がうすれ、学校に行き始める年頃にはあぐらをかけなくなつてゐる。しかし五〇歳以上の年齢の人や、年寄りは炕の上であぐらをかくのに慣れてゐるので、地卓で食事はするが、従来通り、炕に上がってあぐらもかく。

## 八 季節による竈、および食事場所の変化について

朝鮮族の幹部の話によると、夏の間、炕卓を土間に出してそこで食事をすることはあまりないという。あつても近年のことではないかという。ただし、夏は暑いので外に竈を作つてそこで料理をすることはある。しかし、食事をするのではなくまで炕の上とのこと。映画『古井戸』では土間に炕卓をだして食事していたという話をすると、地方によつて習慣は異なることであつた。

確かに、禹鏡沢氏（朝鮮族）によると、米を炊くだけなら藁で十分なので、それほど熱くもならないので屋内の竈を使う。特に暑い日は、外に臨時の竈を作ることもある。これは使わなくなると壊す。夏の間でも、食事は通常、炕の上でするとの答えであつた。但し、特に暑い日は、土間にパプサンを出してそこですることもあるという。この際に座る小さな椅子は、「小板登」という。

このように、夏の間は必ずしも、臨時の竈を作り土間で食事をするとは限らないようである。先ず、夏の間の調理であるが、禹鏡沢氏の例のように、炊飯だけなら、それほど熱くもならないので屋内の竈を使うこともある。それに、三間ある家では、通常、二つ以上の竈（即ち二つ以上の炕）があるので、夏の間は、食事を取る部屋のを使わず、もう一つ（寝室になっている方など）のを使えば問題はない。

さらに、現在ではプロパンガスが普及しているので、夏の間はそれを使うようになつてきた。もちろん、必要に応じて外に臨時の竈を作ることはある。これは使い終わつたら壊すとのことであつたが、郝国敬（漢族）氏の庭で見たように、必ずしも壊すとは限らないようである。【写真53参照】

次ぎに、夏の間の食事であるが、これも必ずしも土間でするとは限らないようである。特に暑い日はそうすることもあるようだが、食事をする炕の竈を使わなかつた場合、炕の上も土間も部屋も、暑さはそれほど変わらないであろう。それだつたらわざわざ、炕卓を土間に出すよりは、炕の上の方が簡単であろう。

もつとも、インフォーマントが朝鮮族だつたことも考慮に入れる必要があろう。朝鮮族の場合、炕も大きいし、漢族や満族よりは炕の上での生活が多かつたと思われる所以で、この傾向が強いことも考えられる。これには、民族の差に加え、地域差もあると考えられる。

なお、地卓を用いている家では、一年を通して、地卓を炕のある部屋の土間において食事をするので、季節による場所の変化はないと思われる。

## 九 宴会の場合

炕での宴会について、朝鮮族の幹部に話を聞いた。普通の大きさの炕なら、一つの炕に一つの炕卓をおく。一卓に四、六人は座れる。大きめの炕なら、二つの炕卓をおくこともある。この場合、八、一二人ぐらいが座れる。さらに人数が多い場合は、南炕、北炕の両方を使うこともある。さらにそれでも全ての人を収容できない場合、隣の家の炕を借りるという。

馬鳳植（朝鮮族）宅は、炕が広いということだけではなく、夫婦の人望もあるが、この家は村の人々の、「三八婦女節」などの集まりに良く使われるという。炕卓も二つあり、食器もたくさんあるので、これを並べれば、三〇人は部屋の中に坐れるという。白紅事（葬儀や婚礼）の際には、厨房の土間も使う。このように、馬鳳植宅は村の中心

になつてゐる。但し、集まるのは基本的に朝鮮族で、漢族は近所の者に限られるという。

## 一〇 葬儀

実際の葬儀で、炕をどの用に使うのかは、調査する機会がなかつた。ただ、葬儀について聞いたところ、次のような答えであつた。中国でも近年は病院で死亡することが多くなつてきたが、自宅で死亡した場合、漢族は炕の上に遺体をのせることはしないといふ。死亡時は炕の上かもしれないが、そのまま遺体を炕の上に置くことはせず、すぐに遺体を清め、服をきせて、棺桶に入れ、南北炕のある部屋の土間か、厨房の土間に台を置き、その上に棺桶を置くといふ。

満族に関しては、調査することができなかつたが、愛新覺羅顕琦・江守五夫共編（一九九六）に収められている、李鴻彬・劉小萌の「満族の社会習俗」に、満族の伝統的な葬儀の手順が記されている。「近代に至つても、満族の喪葬には幾つかの旧来の習俗が保持されていた」ということであるから、これは現代ではすでに見られなくなつてゐると考えられる。それによると、「人が死ぬと、西側の部屋に安置され、炕の縁（炕沿のこと—引用者注）に沿つて土間に上に三枚の板が置かれる。板の高さは死者の年齢によつて決まる。老人ならば炕の高さと同じで、中年の人ならばやや低く、子供は最も低い。遺体はこの板の上に、頭を西に向けて置かれる。これは漢人が遺体を正堂〔中央の部屋〕に安置するのとは異なり、満人が西を上とすることによるものである。遺体は窓からしか運び出すことが出きず、門から出すことは許されない。これは門は生者が通るものという考え方である。」

満族が東よりも西を上位とする習慣については後述するが、この記述からも、満族が伝統的に遺体を炕の上に安置

することができなかつたことが分かる。

朝鮮族の場合、先述のように、死者が出た場合、朝鮮族は遺体を炕の上のウクに寝かせ、枕は生者と同じように炕沿側に置くという。遺体を棺桶に納めるのは出棺の直前とのこと。炕の上に遺体を安置するのは朝鮮族のみであるが、これは炕の大きさと依存度と大きく関係していると考えられる。

## 一一 布団の敷き方

潘徳利（満族）で聞いたところ、布団は畳んで炕の上に置くのではなく、本来は「衣柜」（タンス）に入れるものだという。（【写真3】ではタンスの中ではなく上に置いてあるが）寝るときに布団は、【図4参照】の如く、北炕に横に並べる。まくらは炕沿側に向ける。結果として南側がまくらになるが、これは常に南側にまくらを置くということではなくて、常に炕沿側にまくらをおくようにして寝る。

夜、寝る際に、炕の上でどのように布団を敷いて寝るのか。理想は、実際に寝泊まりさせてもらうことだが、それも出来ないので、満族と朝鮮族の二軒で、布団の敷き方を実演してもらつた。

最初は、孫友氏（満族）である。【写真15・16参照】満族であるが、布団の敷き方に関しては漢族も同じと考えてよからう。

先に敷き布団を敷き、炕沿側に枕をおいて、最後に掛け布団を内側にちょうど寝袋のように織り込み、その上に置く。寝るときは、この形を崩さないように寝袋状の中に潜り込む。この寝袋のような掛け布団のやり方は、満族に限

らず、漢族一般の布団の敷き方である。

【写真15】のように、広い南炕には三枚から四枚が限度なので、残りは別な炕に敷く。（北炕か西側の北側にある炕かは聞きそびれた。訪問時、西側の炕にも火がつけられていたことを考えると、西側の小炕の可能性が高い。これだと、男女を分けるなど、部屋も別々にできる。）

もう一つは、禹鏡沢氏（朝鮮族）の例である。【写真28参照】布団には、一人用と二人用とがある。主人の布団は一人用。息子夫婦は二人用のを使っていた。なお、掛け布団は、朝鮮族の場合、漢族や満族のように袋状に丸めることはせず、日本と同じように平らに敷く。そのためか、掛け布団は、朝鮮族の場合、漢族のものよりも多少厚い。布団の上げ下げは女の仕事とのこと。

もう一つ、馬鳳植（朝鮮族）にも実演はしてもらわなかつたが、布団の敷き方について聞いた。寝るときは、現在は三人家族なので、炕沿側に頭を向けるようにして、竈に近い方から、主人、孫、妻と寝る。

来客で人数が多いときには、多くの布団が敷けるように横に並べることもある。この場合には、まくらを炕沿側に置くことはできない。頭の向きは竈とは反対側になる。もし、炕頭側にまくらを置いたら、頭が熱くて寝られないといふ。頭は冷たくても足先が暖かい方がよく寝られる。【図17参照】布団は、通常は、嫁が上げ下げし、そのあとの掃除も嫁がした。現在では、男でもやることがある、とのことであった。

以上のように、まくらは基本的に炕沿側におくのが、漢・満・朝鮮族とも普通である。来客が多い場合など、布団を横に並べることははあるが、炕沿側に足を向けることは絶対ないと言う。これは別に死者の置き方がそうだから、

というような宗教的な意味合いはないようである。（前述の如く、そもそも漢族は遺体を炕の上に置かないし、朝鮮族の場合は、遺体をウクに置き、枕は炕沿側とする）では、なぜ炕沿側に足を向けないのか。機能の面から考えたら、土間から炕に敷かれた布団に潜り込むには、炕沿側にまくらがある方が便利ではある。朝、起きる時にも同様である。いざれにせよ、習慣で特に理由はないという。

## 一二 民族による差違

東北地方というのは、もともと満族の土地であり、当初は満族しか生活していなかった。そこへ漢族が入植してきた。そして何世代にも渡つて混血を繰り返してきた。その間、言語や生活習慣などの点では、大きな流れとしては、満族が漢化していくたと言えよう。しかし漢族が全く満族の影響を受けなかつたかというと、そうとも言い切れないであろう。例えば、自称漢族という家でも満族式の万字炕を作つてゐる例の如く。従つて、東北地方の漢族というのは、例えば華北一帯の漢族とは、全く歴史的な背景が異なるので同列には論じられないと言う。

そこへ、今度は朝鮮族が移住してきた。朝鮮族は移住の時期が遅いせいもあるが、満族に比べると未だに民族のアイデンティティを残していると言える。それでも大きな流れとしては、漢語も話し、炕も漢族の炕のように小さくなつていくなど、漢化の方向にあると言える。しかし、これは必ずしも漢化ということばが正確ではないようで、東北地方一帯での、統一化現象がおこつてゐる、との見方も出来よう。

新賓は満族自治県とはなつてゐるもの、実際のところ、両民族は、身体的特徴、生活習慣、言語などにおいて、

現在ではそれほど顕著の差違は認められない。それは満族が長い年月をかけて、漢族との混血を繰り返し、漢化してきたためである。

もちろん、満族自治県の成立にみられるよに、近年、満族としてのアイデンティティーの復興が進められているのは確かだが、実際の生活習慣はそう急に変わるものではない。当地で漢族というと、自動的に満族も含まれることが多く、それほど満族は漢化しているということである。

一方、朝鮮族は漢語のほか、朝鮮語も話し、満族と比べると、様々な点で民族のアイデンティティーを強く維持している。もちろん、民族間関係には表面上は何ら問題はないが、深いところでは、複雑な思いがあるようである。例えば、かつて県長は朝鮮族からなるなど、朝鮮族の多くが幹部職についていたが、満族自治県となつて以降、満族がそれに取って代わるようになつていているという。しかも朝鮮族は毎年のように外地に働きに出ており、人口の減少がそうした傾向に拍車をかけているようである。

解放前、朝鮮族はみな農民で、農村部の平均年収は三〇〇元ほどだった。現在は、二五〇〇元になつていて。かつては「三間戸、一頭牛、一個牛車」あれば、「不錯」（悪くない）だった。

現在、県内には朝鮮族がおよそ一三〇〇〇人いる。そのうち、労働力は、四〇〇〇人だが、うち半分の二〇〇〇人は県外で働いている。そのうち一〇〇〇人は、全国各地に散らばつており、残りの一〇〇〇人は、韓国をはじめとして東南アジアや中東など国外で働いている。

農村にいる朝鮮族は二四〇〇戸だが、そのうちの半分の一二〇〇戸には電話がある。（それだけ豊だということ）とりわけ、白旗村は出稼ぎのおかげで豊かな村で、八割が電話を持つているという。白旗村の漢族は、一五〇余戸、朝鮮族は七〇余戸のこと。金を貯めても、炕を設ける関係からか、この辺では他の地域のように二階建てに建て替

える」とはなく、平屋のままであるが、それだけに内装に金をかけるという。

## 各民族の特徴的な差違

家屋の俗称	漢族
上位とする方角	東為大
炕の名称	対炕・南北炕
炕の高さ	高い
広さ	狭い
炕沿の形状	直線
竈の上	窓なし
炕の場所の名称	炕頭・炕梢
食卓	あぐら
座法	（正座）あぐら（女）右立て膝
鍋の形状	（正座）あぐら（女）右立て膝
布団の敷き方	深く、縁が高い
まくらの形状	平らに
まくらの形状	角張っている
タンス	手前に開く
子供の背負い方	両足を開かせる
漢族	満族
—	万字炕
—	西為大
—	口袋房
—	朝鮮族
—	大炕・一面炕
—	低い
—	広い
—	L字型・凹型
—	小門がある
—	アルク・ウク
—	独床、飯床
—	（正座）あぐら（女）右立て膝



写真 74 朝鮮族式の鍋。朝鮮族の鍋の形は、漢族のものと形状が違う。縁が深いものと、鍋の底も浅く、竈の上には縁がないものとがある。鍋の底も深いし、鍋の上部も竈の上に出る。これは現在でもよく見られる差違なので、炕の構造だけでは漢族か朝鮮族か判断できなくとも、この鍋の形状の差によって民族が分かるようになっている。（註3）事例

漢族と朝鮮族の鍋の形状の差

漢族と朝鮮族とでは、鉄鍋の形が異なる。【図19】の如く、漢族の鍋は底も浅く、竈の上には縁がないのに対し、朝鮮族のは、鍋の底も深いし、鍋の上部も竈の上に出る。これは現在でもよく見られる差違なので、炕の構造だけでは漢族か朝鮮族か判断できなくとも、この鍋の形状の差によって民族が分かるようになっている。（註3）事例 報告の写真でいうと、満族・漢族の様式を写したもののが【写真4・7・54・58】、朝鮮族の様式を写したもののが【写真19・32・38・61】となっている。【写真32】は撮影の角度によって見づらいが、漢族のものよりは高くせり上がっている。都市部に住む朝鮮族の間でも、こうした形状の鍋が使われている。【写真74参考】

#### 満族と漢族の上位とする方位の違い

漢族の場合炕「東為大」もしくは「東為貴」といって、東西軸では、東側を上位とする。従つて、家屋の場合も、中央の厨房を挟んで東側

炕の構造や、炕卓、さらに座法、葬儀、布団の敷き方や枕、タンスなどにみられる民族による差違はすでに詳しく述べてきてるので、ここではそれ以外の差違について触れておきたい。なお、満族の場合、伝統的には、まくらの形状やタンスなど、満族独自の様式が存在していたようであるが、少なくとも現在の満族は、万字炕を除いては、基本的に漢族の習慣に準じていている。

図19 漢族式と朝鮮族式の鍋の形状の違い

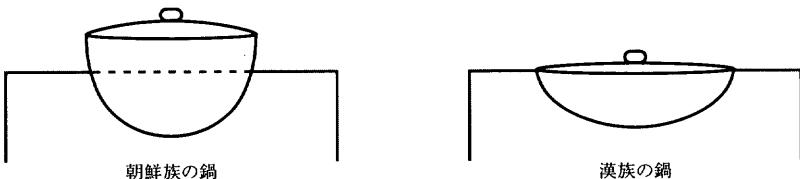


写真 75 老城村の入り口で出会った漢族の親子。写真の親子は満族であるが、漢族同様、子供の両足をそろえ、寒い冬の外出なので、布団でくるんでいる。但し、満族は、漢族のように動かないはしないという

つて、東西軸では、西側を上位とする。従つて、伝統的な家では、西側の部屋に大きな万字炕を作り、東側の部屋には万字炕ではなく、小さめの炕を一つ作るだけであった。このほか、祖先の位牌も西側の部屋の万字炕の、南北の炕つながつてある部分（西炕）の上部に置いた。但し、これはあくまで部屋の東西の話であつて、炕の上の炕頭、炕梢に関しては満族も漢族と同じである。

もっとも、現在では満族も漢化が進み、漢族の家と同じように、東側の部屋に万字炕を作ることが多くなつてゐる。実際、調査した満族のうち、間取りの調査を行つた三宅とも、全て東側の部屋に主要な炕（うち潘德利宅と孫友宅は万字炕）

と西側に二つ部屋がある場合は、東側の部屋が上位となるので、客や老人は必ず東側の部屋の炕を使う。

ちなみに、男女の客が来た場合、可能であれば男女を分離する。しかし、炕が一つしかない場合はそうしない。男女とも、客人であれば、「炕頭」へ座らせる、とのこと。

を設けていた。

### 子供の背負い方の民族差

朝鮮族の場合、赤ん坊を背中におんぶするとき、日本と同じように、子供は両足を曲げて親の腰にからめるようにしている。漢族の場合は、子供の両足は真っ直ぐのまま、下に向けた状態で背負う。冬など寒いときに外出する際には、子供の両足をそろえ、布団でくるまい、動かないよう太い紐で来るんだ状態にして出かける。この状態で前でだっこするか、時には背負う。**【写真75参照】**

朝鮮族の婦人は、子供を背負つたまま台所仕事などをするため、年を取つて背中が丸くなるのは朝鮮族の老婆ばかりで、漢族の老婆は丸くならないという。概して、朝鮮族の婦人の方が、漢族の婦人よりも勤勉であるとのこと。

### 一三 変化の問題

#### 家屋の構造の変化

現在の満族の間では、伝統的な口袋房がなくなり、構造上は漢族の家屋と同じになつてきている。これにともなつて、伝統的な「西為大」の考え方も変わり、満族の家では、部屋の東側に万字炕を設けるなど、大きな変化を遂げている。一方、朝鮮族の場合も、満族ほど劇的ではないが、伝統的な家屋の構造は、炕の形状の変化につられてか、徐々に漢族のものに接近しつつある。また古い草砬子房も消えつつあるのが現状である。

## 炕の変化

炕の構造は、本来、満族・漢族・朝鮮族によつてそれぞれ、広さ、高さ、形状などにおいて特徴があつたが、現在ではその特徴が薄れつつある。満族でいうと、特徴的な万字炕を設けない満族が出てきていること（高振海宅がその例）、調査した例では見られなかつたが、漢族でも万字炕を作る場合があることなどがあげられる。

特に大きな変化は、朝鮮族の炕であろう。漢族や満族との交流のなから、炕の小型化が進行し、これにともなつて形状の変化もみられる。禹鏡沢氏の炕がそのいい例である。漢族のものと比べると大きいが、それでも土間の部分が多少広くなつてゐる点で、漢化が進んでゐるといえる。こうした変化は、時間の変化だけではなく、民族間の影響も考えられる。あるいは、東北地方一帯での標準化ともいえよう。そのいい例が、近年、流行してゐる吊炕の普及である。吊炕の普及は、明らかに民族の差違を超越している。

## 炕卓の変化

炕卓も大きな変化のなかにある。まず、炕卓であるが、これも時間の変化とともに、民族間の差違が減少してゐる。満族と漢族の炕卓が歴史的にどう違つていたのか、同じであつたのかは不明であるが、長方形の炕卓の方がどうやら古いタイプのようであつた。ところが今日では、方形の大きめの卓が作られてゐるようで、調査地でも、任志有（満族）と禹玉炕（朝鮮族）の二軒で、古い長方形の炕卓とともに、新しい方形の炕卓を使つてゐた。任志有は満族であり、禹玉祚は朝鮮族であるので、この例でも民族の差違は超越してゐる。

最も大きな変化を受けてゐるのは朝鮮族であろう。伝統的に朝鮮族の卓は、一人用のトクサン（独床）や大きめの

パブサン（飯床）など、漢族の炕卓とは異なっていた。しかしながら、近年、これも漢族の影響からか、伝統的な朝鮮の卓ではなく、漢族と同じ大きさの炕卓を使うようになつてきている。

しかしながら、より大きな流れとしては、炕卓から地卓への移行が進行しているということである。調査地でも、高振海（満族）と郝国敬（漢族）の一軒で、炕卓を使わず、円形の地卓を使っている。炕卓との併用期間があつたのかどうかは分からぬが、少なくとも現在、完全に地卓だけで食事をしているというのは、正直、驚きであった。しかも炕そのものは残り、実際に活用しているのにである。こうした情況は、ちょうど日本でいうと、いろいろが残つている間に、ちやぶ台を飛び越えて、ダイニング・テーブルを板の間に置いているような状況といえよう。

確かに、床や室内の暖房器具としての炕と、食卓とは別な系統のものであり、部屋の暖房さえなされれば、炕卓を使わなければならぬ必然性は薄れる。郝国敬（漢族）の場合には、特に家族の人数が多く、炕卓では不便である、ということも関係している。

調査した一一例のうち、二例と、数はまだ少ないが、今後、地卓がさらに増える可能性はある。しかも二例は満族と漢族で、両民族による区別はない。但し後述するように、朝鮮族は別である。もつとも、炕卓から地卓への移行といつても、他の地方の漢族と比べると、ある意味では、過渡的な使い方をしている。それは、椅子とともに、炕沿に腰掛けるという使い方をしていることである。このため、毎回、地卓の移動が必要となり、折り畳んで回転しながら部屋の中を動かせる、円形のものが使われている。固定式の八仙卓を置くようになつたら、本格的な変化といつてよからう。

東北地方の炕卓が日本の鉢々膳やちやぶ台のように、将来的に消えてしまい、完全に地卓に移行するのかどうかは、今後の展開を見なければ分からぬ。おそらく、漢族や満族と比べ、炕への依存度が高い朝鮮族は最後まで炕卓を使

用することが予想される。それに地卓の椅子として炕沿を使うにしても、朝鮮族の炕は低すぎるのと、このために炕の高さを上げないといけない。さらに地卓を置くためのスペースを確保するために、炕のサイズを縮小しなければならなくなるからである。

もつとも日本でも、畳や座敷が残る限り、膳やちやぶ台は完全には消滅しておらず、たとえ地卓が優勢になつたとしても炕卓は何らかの形で残ることも考えられる。

### 年齢による炕と平座に対する差違

炕そのものは、少なくとも農村部では、急速に消滅の方向に向かっているとは考えられない。しかし炕卓から地卓への移行は静かに進行しているようで、これにともない、食事方法や座法に関しては、同様に静かな変化が進行している。

特に興味深いのは、すでに地卓に移行している郝国敬（漢族）宅での話である。即ち、子供らは、学校に通学するようになると、椅子座の生活に慣れるため、家でも、炕に座つて炕卓を使って食事をするというのを好まない。中国の小学校では昼食は普通、自宅に帰つて食べるが、昼食を食べに自宅に帰つたときにも、炕には上がりらず、炕沿に座つて、地卓で食べる。このように、若い人は靴を脱ぐのも面倒なので、炕の上に上がりたがらない。それに、地卓が普及したてから、子供達もあぐらをかく習慣がうすれ、学校にかよう年頃には、あぐらをかけなくなつているとう。しかし、五〇歳以上の年齢の人や、年寄りは炕の上であぐらをかくのに慣れているので、地卓で食事もするが、従来通り、炕にあがつてあぐらもかく。郝国敬氏は、もし今後家を建て直すとしても、炕は作るつもりだという。

このように、学校教育が平座から椅子座への転換に大きな影響を与えたというのは、日本でも明治維新以降見られ

たことで、興味深い。また、子供と年寄りとで明らかに慣れ親しんだ座法に差が生じており、まさに変化のまつただ中にあることが分かる。

このように平座の習慣が減少しつつある東北地方であるが、中国の南方と比較すると、それでも平座と椅子座とう、南北の差が明確に存在する。

中國内の南北の生活習慣、とりわけ座法の差についても、何人かに質したことがある。北方人が南方に行くと、「不習慣」で、平座して座りなくなると言う。逆に南方人が北方にきても、同じく「不習慣」だが、慣れてくると、平座もなかなかいいものだという。

大連で話をした若い人（二〇台前半）の中に、丹東からきた満族の人のがいた。丹東の実家にはまだ小さな炕があるが、大きな万字炕はない。そのかわり大きなベッドがある。冬は炕で、夏はベッドの上に寝る。南方に行つたときなど、生活習慣の違いにとまどわないと聞いたところ、実家でも夏はベッドに寝るなど、ベッドの生活にも慣れているので違和感はないということであった。

このように、炕のある地方でも、ベッドで寝ている人もおり、学校や外の食堂などでは椅子座をしているので、思うに、平座から椅子座への転換にはそれほど違和感はないのかもしれない。これにはこの話者のように、若いため、より多く外の社会で椅子座に慣れしたしんでおり、且つ若さ故に適応力があるということも関係していよう。

## 結びにかえて

### 東北地方の冬の寒さ

東北地方の冬は本当に厳しい。冬の間、農村部の各家では家の全ての窓枠に、外側から幅五センチほどの紙を貼り付けていく。少しでも隙間風を防ぐためだ。冬の到来に備え家族総出でこの作業をするのが、秋の東北地方の風物詩となっている。この紙は春まではがさない。つまり、冬の間、東北地方の農村の家では、窓を開けることを一切しない。換気はどうするのかと聞いたところ、冬の間は空気も乾燥していく、入り口の戸の開け閉めだけで十分の換気ができるという。

このように、東北人は冬に窓を開けるということをしないため、よその土地に行つてもとまどうことが多いという。といえば、私が南京大学に留学していたとき、東北地方から来ていた学生が、南京では冬の間も部屋の窓を開けて寝るので驚いたこと、暖房がない南京の方が冬はかえって寒いこと、南京にきて初めてしもやけになつている人を見た、などと話していたのを思い出す。中国人学生宿舍は、通常八人部屋で、換気のためか冬の間でも窓を開けたまま寝ることが多い。同行の劉正愛さんも、日本に来て、ようやく冬でも窓を開ける習慣に慣れてきたという。

東方地方の炕は、こうした厳しい環境のなかで使われているものである。炕は炊事と暖房をかねた、非常に合理的な設備であるが、部屋全体が暖まるわけではない。もちろん、炕は床だけでなく、床から間接的に部屋全体にも多少の暖房効果があるが、寒い冬となると、床は暖かくとも、やはり部屋は寒いままだという。これは、足もとは暖かいが上半身は冷える、日本のこたつと情況はよく似ている。

豊かな農家などでは、炕に加えて、「土暖気」(自家製の暖房設備、ほどの意味)と呼ばれる、簡単なスチーム暖房

の設備を設けているところも、希にはあるがあるという。このためにもう一つの竈を設けており、薪などを使つて湯を沸かす仕組みだという。これは、部屋の暖房としては不十分という、炕の欠点を認めるものもあるし、また一方で、炕を撤廃しない点で、炕に対する執着という二面性が出ていて興味深い。

#### 炕のもつイメージ

タクシーの運転手に、炕の情況について聞いてみたことがある。大連では、平屋の場合、まだ炕が残されていると「落後」（遅れた）という感覚が中国人にもあるのではないかと、聞いたところ、確かにあるという。炕は、どこかに「落後」（遅れた）という感覚が中国人にもあるのではないかと、聞いたところ、確かにある。炕のある家は、平屋なので、炕そのもとと言うよりも、炕を含めた平屋に対するノスタルジーのようなものは確かにある。平屋だと、互いに気軽に行き来があつたが、「楼房」（二階建て以上の建物）になるとそれもなくなり、以前のような親しい近所づきあいが少なくなつた。炕の消滅とともに、人間関係も薄くなつたような気がすると言う。これは日本で言えば、いろいろの消滅からダイニングキッチンへの移行、さらには平屋から団地への移行などに伴う、人間関係の変化とも共通するものがあり、興味深い。

沈陽の西塔朝鮮人街にある韓国との合弁ホテル、正昌賓館には、オンドルの設備を整えた部屋があるとのことであった。これは炕というよりは、おそらく韓国式のオンドルと思われる。見学を申し込んだが、なぜか断られてしまつた。オンドルの部屋を外国人には見られたくない、という気持ちがどこかにあったのだろうか。フロントの従業員は、そのような部屋があることを否定はしなかつた。

炕に対するノスタルジーは炕卓にも向けられる。購入した炕卓をもつて駅にいたら、いろいろな人が詰しかけてきた。古い炕卓なので、懐かしむ感じで話しかけてきたらしい。日本でいえば外国人が古いやぶ台を持つて駅にいる

ようなものだろう。一様に、これはとても古い炕卓だ、と話しかけてくる。今、炕卓を作ると、一卓七〇一八〇元はかかるという。五〇元で購入したが、これはは妥当な値段だった。

同行の劉正愛さんの話によると、近年の都市に住む中国人は内装に金をかけるので、室内がとてもきれいだという。とりわけ七九年以降、収入が増えると部屋の内装にかけるので、すごくきれいだという。彼女の家は朝鮮族ということもあるが、部屋に入るときには玄関で靴を脱ぎ、裸足もしくはスリッパをはいて部屋に入る。部屋によつては絨毯が敷いてあり、時にはしゃがんで座ることもあるという。

部屋に案内されると、確かにきれいで、今までの中国人の家のイメージが覆される思いであった。劉さんの家の快適さを見て、単純に、人情味あふれる炕の生活に戻るべきだとはいえないと思った。日本のいろいろに似て、これがいいとするのは外国人のノスタルジーにすぎないかも知れない。暖房はヒーターで可能であり、人間関係の疎密は、当事者がコントロールできる方がいいとのことであった。

炕は、それを日常使つていいる当事者にとつては、あくまで暖房施設であり、これが石油ストーブやエアコンに変わつても、暖房の目的は果たされるので、その変化に対する特別な違和感はない。当事者がその変化に伴う社会的変化、つまり人間関係の変化に気がつくのは、ずっと後になつてからである。

### 今後の展開

いくつかの事例を子細に紹介、分析してきたが、こうしてみると、炕の構造や使われ方、炕卓と地卓の使用情況な

ど、数家族の事例に過ぎないが、それでも実際にはさまざまな使われ方をしており、決して単純なものではないことが明らかとなつた。

多様性の要因の一つは民族間の差違であるが、もう一つ考えられるのが、時間による変化である。これには、民族間の相互影響、あるいは東北地方の標準化ともいえる動きが関与しており、変化をより複雑なものとしている。

いざれにせよ、明治維新以降、現在も平座から椅子座への移行期の中にある日本人としては、東北地方の炕と炕卓、およびそれらの使われ方の変化の問題は、自らも体験しているだけに、非常に興味深いものである。こうした視点は、すでに完全に椅子座に移行している他の地域の中国人には、もはや失われているものである。

そして我々の体験からいようと、エネルギー体系の転換が、座法を含む生活様式のパラダイム・シフトの根底にあるということを知っている。即ち、日本においても、平座と銘々膳やちやぶ台での食事から、椅子座とダイニング・テーブルへの転換には、暖房や調理のための燃料が、いろいろや竈で使われていた薪から、ストーブやコンロでの石炭や石油、ガス、さらには電力というふうに、転換してきたことと対応しているのである。このことから考えると、調査地でも、調理にはプロパンガスが併用されはじめており、また「土暖気」という簡単なシステム暖房の設備を設けているところも出始めているようで、エネルギー体系の変化が起こりつつある。今後は、おそらく都市近郊の農村から急速に変化していくものと考えられるが、広大な中国だけに、農村部全体が変化するには、まだ相当の時間がかかるものと思われる。

- 1 中國東北部の朝鮮族に関しては、愛新覺羅顯琦・江守五夫共編（一九九六）、中國東北部朝鮮族民俗文化調査団編（一九九九）、佐々木衛・方鎮珠編（二〇〇一）などの調査報告書が出されている。しかしながら、炕に関する調査はなされていないようである。
- なお、愛新覺羅顯琦・江守五夫共編（一九九六）は、私の調査地と同じ新賓満族自治県での調査報告である。また、新賓満族自治県に関するは、同行の劉正愛氏による論文（二〇〇〇、二〇〇一）がある。
- 2 「嘎拉哈」（ガラハ）に関しては、劉正愛氏の報告（一九九九a）がある。詳しくはこちらを参照いただきとして、簡単に紹介したい。ガラハとは動物の後ろ足の膝蓋骨を指す満語で、最もよく使われるのは豚のガラハで、他に羊や鹿なども使われる。ガラハは六面長方形で、上下左右の四面は立てることができ、それぞれ「珍」「鬼」「青」「梢」などの名前が付けられており、サイコロのように、この四面の変化によってゲームが行われる。戸外で青年男子がこれで遊ぶほか、室内的炕の上で、二、三人で遊ぶ。満族のガラハ遊戲は古い歴史があり、金代の女真人にまで遡ること。今日でも、農村部ではこのガラハ遊びが行われているが、炕の上で遊ぶのは主に女の子のこと。
- 3 朝鮮族と漢族の鍋の形状の違いに関しては、中国東北部朝鮮族民俗文化調査団編（一九九九）「中國東北部朝鮮族の民族文化」に収められている、金旭賢の「食文化の変遷—延辺朝鮮族の事例」の中でも紹介されている。これによると、移住初期、延辺朝鮮族が携帯してきた釜はあまり深くなく、伝統的な平壠釜と腰の広い朝鮮釜であったが、一九五〇年代以降、延辺朝鮮族自治州が成立すると、朝鮮族釜工場が建てられ、そこで平壠釜よりも丈を高くし、飯を焚く以外にも饅頭やパンを作れるように深くし、釜の腰にも縁をつけた延辺釜が発明されたという。
- また、同書に收められている韓景旭の「朝鮮族と漢族」によると、鍋のみならず、竈も漢族と朝鮮では異なっていたといふ。即ち、移民当初、朝鮮語の竈には釜が三つも四つもおけたが、漢族の竈は鍋が一つしかおけなかつたという。その後、漢族も朝鮮族にならつて複数の鍋をおける竈に変わつていったという。なお、この大きな竈に関する、當時、漢族は朝鮮族のことを「四大」といつてからかっていたという興味深い話を述べている。四大とは、即ち大きな炕（オンドル）竈、牛車の車輪、ズボンのまちの四つをさし、それらが漢族のものよりも大きかつたからである。

引用・参考文献

愛新覚羅顯琦・江守五夫共編 一九九六『満族の家族と社会』第一書房

李鴻彬・劉小萌（柳澤明訳）「満族の社会習俗」、愛新覚羅顯琦・江守五夫共編 一九九六『満族の家族と社会』第一

書房

中国東北部朝鮮族民俗文化調査団編 一九九九『中国東北部朝鮮族の民俗文化』第一書房

劉正愛 一九九九a「子供の遊び―来し方行く末 満族の伝統遊戯―ガハラ」「ひすば」No.41 スポーツ史学会・会

報

一九九九b「マンジュー（満州）、旗人そして満族―民族集団の形成パターン」「白山人類学」6 白山人類学  
研究会

二〇〇〇「現代風水師評伝」、聶莉莉・韓敏・西澤治彦・曾士才共編『大地は生きている―中国風水の思想  
と実践』てらいんく

二〇〇一「民間信仰から見える風景」「アジア遊学」三二号 勉誠出版

佐々木衛・方鎮珠編 二〇〇一『中国朝鮮族の移住・家族・エスニシティ』東方書店

楊英傑 一九九一『清代満族風俗史』遼寧人民出版社

佟悅 二〇〇一『関東旧風俗』遼寧大学出版社

(二〇〇二年五月三十一日 受理)